
『禁・三国無双』 ～孫呉編～

こんたそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『禁・三国無双』 〔孫呉編〕

【Nコード】

N6422Y

【作者名】

こんたそば

【あらすじ】

後輩が持つて来たゲームをサークル仲間と共にクリアしようとしてスリッチを入れた俺は、自分自身が育ててきたキャラクターに憑依した上でゲームの世界に入り込んでしまった。

ヒロインの攻略方も、ストーリーの行方も分からないがやれることはやっていくしかない！

目指せ、ハッピー・エンド！！できればヒロインと添い遂げたい！！

プロローグ

プロローグ

俺こと、北郷一刀はとある大学の3年生。

専攻は教育学部、趣味は歴史。 戦国時代や三国志などのことが話題に上るとちよつと燃える。

1年生の時に『歴史研究同好会』というサークルを立ち上げて、日夜資料を読み新しい発見を模索して……いるようなことはない。趣味の合う友人や後輩と共に会話して盛り上がりたり、戦国武将や三国志の英雄をモチーフとした漫画やゲームをして楽しい時を過ごしたりしている。

最近、特にはまっているのが後輩の篠塚健治が持って来た『禁・三国恋姫』というエロゲである。

ちなみに媒介はDCPドリーム・キャスト・ポータブルという小型の携帯ゲーム機だ。DCPの魅力は無線ネットワークを使い複数の人間で同じゲームをプレイし攻略できること。

『禁・三国恋姫』というのは、一昨年辺りにパソコンゲームとして発売され、バグや修正を経てDCPにおいて発売されることになったもので価格は新品で8860円と高額だが、購入者の反応は上々である。

ヒロインは全員可愛いし、そのヒロインたちと絡むシーンCGもかなりエロくて最高である。

ただ、そこまで行き着くには長くて辛い過程がある訳で……。

- ・ まず、プレイヤーは自身の分身となるキャラクターを作成する。
- ・ その後、自身が所属する勢力を選ぶ。【蜀・魏・呉・袁・漢・南】の中からひとつ。

・ 難易度は南蛮が『Very Easy』、袁家が『Easy』、劉蜀が『Normal』、曹魏が『Hard』、孫呉が『Very Hard』、漢王朝が『Maniac』となっている。

・ ネットにアップされるシーンCGは南蛮か、袁家、もしくは劉蜀の三つの勢力がほとんどで曹魏や孫呉はもとより、漢王朝のシーンCGがアップされるのは見たことが無い。つまり攻略者がいないわけだ。

・ ちなみにプレイヤーキャラクターがヒロインたちと接触できるようにするためには、キャラクターのレベルを上げて能力値を上げ、將軍又は軍師として登録される必要がある。つまり、周回プレイは必須。加えてひとつの勢力で使用できるのは1人のキャラクターのみ。しかも他の勢力では使用不可という鬼畜ぶり。

で、俺たち『歴史研究同好会』では話し合いの結果、難易度が『Very Hard』の孫呉を攻略するべくキャラクターをエディットした。ちなみに名前を考えるのが面倒であった為、孫呉ルートヒロインとして登場しない孫呉の武將の名前をつけることにした。俺の場合は、太史慈だ。真名は本名の一刀を使用。

・ そうそう、【真名】っていうのは『禁・三国恋姫』の世界観に

あるその人の個性や生き様を表す神聖な名前で、親兄弟や信頼の置ける仲間などにしか教えないものだそうだ。異性に真名を教えるっていうことは、そういう関係になったという合図らしい。

ちなみに一緒にプレイする人間をここで紹介しておく。

篠塚健治 後輩 使用キャラクター名：魯肅

笹本京一郎 先輩 使用キャラクター名：徐盛

及川肇 同級生 使用キャラクター名：韓当

といった感じだ。真名は俺と同じように本名の名前を使用している。

さつきも説明した通り、『禁・三国恋姫』というエロゲの真髓に辿り着くまでには最低でも2周はしないといけないということで、俺たちは1周目と2周目のイベントフラグを一切無視して、自分の分身たるキャラクターたちの育成に専念した。おかげで2回とも独立後の曹操軍との戦いで敗北しゲームオーバーとなった。

1周目の時は「まあ、仕方がないさ。よし、次だ！」と思っただが…。

2周目の時は「王が不在って何だよ、これ！？緊急事態、王が戻るまで防衛をしてくれ……」って、10万の兵をたった4000人とか無理だろ！！はあはあ、王発見？よし、盛り返すぞ！って、曹操軍の刺客によって王が討たれた！？孫呉軍の士気がガタ落ちっ！？ふざけんなああああああ！！！！」ということで、4人で暴れた。

で、本命の3周目に至るわけだ。

「かずぴー、恨みつこなしやで」

「勿論だとも」

「ふふふ、楽しみだね」

「先輩方、こればかりは譲りません！」

俺たちは色とりどりのDCPを机の上に置き、向かい合っている。

「覚悟はいいな、お前ら」

俺の掛け声に頷く3人。

「いくぞ！最初はグー、じゃんけんぽん！」

俺：パー

健治：チヨキ

笹本先輩：パー

及川：パー

「やったー！僕は本命の陸遜ちゃんをお願いします」

・ 最後に言い忘れていたが、恋人になれるヒロインは1周につき1人と決まっている。ハーレムは不可能ということだ。ただ、無線ネットワークを繋げて一緒にプレイしている人間にはシンCGが

送られて共有することができる。

結局、俺は負け越したのだが本命であった孫呉の王である孫策は皆選ばなかった。俺が彼女を選ぶといたら、皆に『お前、マジかよ』みたいな目で見られた。悪いかよ、コンチキショー。

で、4人揃ってDCPのスイッチを入れたのだが……

気付けば、俺は鮮やかな紅い鎧を身に纏い荒野に立っていた。

健治はどこぞの商人みたいな服を着込みその手には扇、笹本先輩は白い服の上に青い鎧を身に纏い大きな斧を背負い、及川はモンゴルの遊牧民が着ていそうな民族衣装みたいな奴を着ていた。

「……………」は…どう? 「……………」

一話

一話

20年近く生きてきたが1度も遭遇した事の無い今現在の状況に戸惑いながらも、俺は遠くの方に見える山々を眺めて心を落ち着かせていた。

ありえない…と切って捨てることは簡単だが、身に纏う鎧の感触や重量感、頬を撫でる風の匂いなど現実味を持たせるには十分なものだ。間違いない、考えたくはないが俺たちはゲームの世界に何らかの理由で紛れ込んでしまったのだ。

元の世界に帰れる保障は無いけど、生きていくためには……って、

「俺がシリアス風味にあれこれ考えているのに、お前らは何やってるんだよっ!!」

「先輩、考えるよりも先に自分の状態を確認しないとやばいですって。兵士数がゼロになっているから、ここで賊に襲われたらまずいですって」

「そうか？」

健治はそう言っって緑色のDCPを操作する。よくよく見れば笹本先輩も青色の、及川も赤色のDCPを操作している。

彼らに倣って俺も手に持っていた黒色のDCPを操作して、自身の状態を確認する。

「……とりあえず、育ててきた『太史慈』の身体らしいな。これなら、しばらく兵はいなくても大丈夫だろ」

気配を感じて顔を上げるとニコニコと笑みを浮かべた笹本先輩が目の前に立っていた。

「そういえば一刀くんって、資金が溜まったらキャラクターや部下の強化に専念していたよね。ちなみに一刀くんの攻撃力ってどのくらいなの？」

「えーと、……2万と10ですね」

「……2万!?」「」

俺と笹本先輩がいる所からちょっと離れた所にいた2人も俺の突然の宣言に驚き、作業を中断させて近くにやってきた。

3人が俺のDCPの画面を食い入るように見つめ、頬を引き攣らせた。

【ステータス】

名前：太史慈 字：子義 真名：一刀 資金：190

体力：6000 攻撃力：20010 防御力：15000 移動力：200

兵士最大数4000人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

スキル（自発）

『大号令Lv3』：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「かずびー、いくらなんでもこれはないわー」

「ゲームバランスの崩壊もいいところですよ。確か孫呉編の最大の難関である曹魏軍の曹操でも攻撃力3000に、固有武器『絶』の攻撃力3000を足しても6000ですよ。まあ、あちらの最大兵士数は10000人ですよ」

「一刀くんの部下も大概チートだよ。その分、コストがべらぼうに高いけど」

「言わないで下さいよ、笹本先輩」

「ハハハハハ」

俺たちは談笑に近い雰囲気の中、自分自身の状態を把握していった。

「さて、これからどうする？」

俺がこう切り出すと及川と笹本先輩が腕を組んで悩み始めた。

これがゲームの場合、悩む必要もなく孫呉編の主要キャラクターの1人である黄蓋に連れられて、一兵士or一將軍、一軍師として雇用される訳だが。

「ぶつちやけ、袁術軍の客将となっている孫呉軍に行くメリットはないですよって。資金半分と兵を雇うコストが2倍になるのは痛すぎです。特に北郷先輩には」

健治が皮肉を交えて言い放った言葉に及川と笹本先輩は大きく頷いた。

くそう、別にいいじゃないか。最強無敵の軍って憧れるだろ。

「ここで僕は、最初の内は孫呉軍に加わずに建業などの街で太守となることを提案するって。この世界では官位をお金で買ったはず。ゲームをやっていたときは孫呉編にどうせ行くのに無駄な選択肢だなんて思っていたけど、今現在の状況なら自由気儘に動ける拠点も得られて、兵力や資金を集めるのに丁度いいと思うって」

「うん。その流れで進むっていうことは孫呉軍が袁術軍から独立した辺りで同盟なり、不可侵条約を結ぶってことか」

「憧れのヒロインと生身で絡めるって思っていたけど、それよりも自分の命の方が大切ですからって」

確かに……と健治の言葉に俺自身同意する。

あの小麦色の母性を中心に色んな所を俺の自由にしたいっていう気持ちは勿論あるが、それよりも生きて元の世界に戻りたいっていう気持ちの方が強い。

「当面の方向性はそれでいいかな？」

と、笹本先輩が俺たちの意思を確認するように見渡す。

「それでええと思うで。ワイとしても、拠点があるほうが動かしやすいんや、アレ」

及川はどこか遠くを見ながら了承の言葉を発した。そういえば、及川のキャラクターってどういう方向性だったっけ？健治は完全に内政向きなキャラクターだったし、笹本先輩のは奇襲をかけて敵の数を減らすことに特化していたはず。及川のキャラクターが活躍していたのって……反董卓連合の時の関攻めの時か。つまり攻城戦が得意なキャラクターってことだよな。

でも、それがなんであんな態度になるんだ？あいつの武器ってなんだったっけ？

「それじゃあ、先輩方。資金50000で、建業の太守の座と官位を買いますよって。ぼちっとな」

【ピロリン 『太史慈』は『建業の太守』となった】

「5万をポンつと出すとはすげえ……………って、太史慈って俺じゃ

ん!？」

周囲を見れば3人に「何を今更」的な眼で見られていた。

「王が一番強い者を置いておかないと拙いでしょ。固まるのも偶にはいいけど、今はさっさと建業に向かうよ。太守さま」

「そうやで、かずぴー。色々とせなんことは山ほどあるんやからな。ま、太守の場合は文字通り山の如くあるんやろうけど」

「先輩、僕らも“少し”は手伝いますから、頑張つて生き残りましょうね。余裕が出来たら、ヒロインとにやんにやんしたいですって」

「健治！本音が駄々漏れだぞー!!」

「大丈夫です、ワザとですからって」

おいおい。生き残れるのか、このメンバーで。先々が不安だ…。

一話

二話

健治の資金50000を払い、俺は建業の太守となった。

建業といえば孫呉の本拠地となる場所ではないかと思うかもしれないが、孫堅が生存していた時の本拠地は荊州の長沙であり、孫策らが袁術軍の客将となったのなら寿春の近辺にいるだろう。

俺が建業の太守となつてはじめてやったのは、ユニットの作成だった。資金は健治持ちで。

ここで『禁・三国恋姫』のユニットについて説明しようと思う

・ まずユニットの追加についてだが、国のレベルによって生み出せるユニットのランクや種類が変わってくる

・ 現在はレベル1の状態なので、一番弱い『新米指揮官』コスト：150を作成しようと思う。

・ その後作成したユニットに名前をつける。今回は分かりやすいように【田中】とつけておこう。

【プロリン】

名前：田中

体力：300 攻撃力：160 防御力：120 移動力：100

兵士最大数：100人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

・ 作成したユニットは一度作成したら消去できない。代わりに、最大100人まで作成できる。ただし周回プレイには持ち越せないので、そこら辺は注意しよう。

・ 部下になる兵士もここでつけておく。が、現在の建業の街に必要なのは戦闘に必要な兵士ではなく、俺たちの街を築く要員となるわけで…、今回は建築スキルを持つ市民兵をつけておく。

名前：田中隊 兵種：市民兵

体力：3 攻撃力：2 移動力：100 コスト：6（1人につき）

スキル（自動）

『建築Lv3』：建物をすごい速さで建てることが出来る。兵士数によって効率があがる

・ と、まあこんな感じである。

ゲームであれば、ユニットを量産して建築や農業・漁業、武器防具開発など片っ端からやれたのだが、悲しいかな。この世界には俺たちと同じように生きている人間が多く存在する。彼らを蔑ろにして建業の発展はない。

ということ、最初は建業自体を住みやすい街に変えていこうと思う。

俺たちは公共事業として、街で暇していた若者や仕事が無い者たちを雇って、メインストリートの拡張をして人通りを楽にした。その際、立ち退いてもらった方々には田中隊が立てた別の家に移り住んでもらったり、メインストリート脇に建てた店に入ってもらったりした。

街道整備なのだが、これは他の街と道を繋ぐことで流通をよくするために必須なのだが、今のところは近くの村に伸ばす程度にしておこう。

治安をよくするために元の世界でいう交番を建業の街の至る所に作った。何かあったときのためにいくつかの交番には『新米指揮官』のユニットを何体かおいておくとしよう。

内政に関しては次の機会にでも…ということ。

「健治の財布はとんでもないことが分かった所で、笹本先輩…ゴホン。徐盛、各地の状況を説明してくれ」

「一刀くん、慣れないのは分かるけどしっかりしてよ。まあ、いいや。とりあえず、僕の兵たちを各地に散らばらせて分かったことだけど、長沙の太守の名前は孫文台っていうんだってさ。年代に関しても『禁・三国恋姫』の舞台よりも結構前みたいだよ」

「それじゃあ、しばらくの間は内政オンリーやな。しかと農業や漁業、武器防具の開発等をやって地力をあげておけっていうゲームの

神さまからの啓示やる。商業に関しては健治がやるやろうから、ワイは開発関係をやるかな。先輩は何をします?」

「そうだね、今まで通り情報管理と農林水産関係は僕がやるのかな。一刀くんは、一般兵士の鍛錬っていう所じゃない?」

「ま、太守の仕事をきっちりやってからの話だけど(ね・って・な)」「」

「それひどくね!?!」

結局、俺の意見はまったく取り入ってもらえず、部屋に戻った俺は仕方なく判子を右手に、【ぺたこん】【ぺたこん】と目を通した書類に判を押していく日々。

それから暫く経った、雲ひとつ無い青空でお洗濯日和だなあと思っ
て窓の外の景色を眺めていたある日、

「大変ですつて!海賊が現れましたー!」

息を切らしながら健治が俺の執務室に走りこんできた。

俺は素早く自分のDCPを手にとって画面を見る。するとそこには『Warning』という赤い文字が浮かんでいる。

そして、敵の情報が浮かび上がった。

【白髭海賊団】 兵士総数5万

備考

名前：太史慈隊 兵種：強化兵

体力：100 攻撃力：100 移動力：100 コスト：100
0（1人につき）

スキル（自動）

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

三話

三話

【VS白鬚海賊団】

『勝利条件』

- ・ 敵軍の戦力を70%減少させる

敗北条件

- ・ 建業の街（本拠地）への敵軍到達』

DCPに映し出される勝利敗北条件の確認を行った俺は自軍の戦力を冷静に見据える。現在の段階で5万という戦力とまともに戦えるのは俺たちくらいだ。街の人と新規ユニットの組み合わせが戦場に出ても戦果は期待できない。

「えーと、こちらの戦力は俺（太史慈隊）と…徐盛隊。街の防衛は及川…じゃなくて韓当隊が務める。3部隊だけじゃ心細いから警邏隊をいくつか建業の街付近に配置しておくとして、作戦としては俺が最前線で敵の数を減らして、徐盛隊が討ち洩らしを確実に仕留めるのがいいか」

「一刀くん。それは方針であって、作戦じゃないからね」

「……本職の軍師ほしーな」

俺はそのことを切実に思った。

『Warning』

という赤い文字が表示され、敵軍の侵攻を確認した俺は自分（太史慈）のスキルである『大号令Lv3』のことを考えた。

この『大号令Lv3』は自軍の攻撃力を15%上昇させる上に、自分の最大兵士数の15%にあたる人員を毎ターン補充することができる。使用回数は『Lv』と同じため3回である。つまり『大号令Lv3』を3回行えば、俺の最大兵士数である4000人に達するのだ。及川や健治にチートとか、これはないとか、ゲームバランスの崩壊とか言われるのはこれが原因である。ただし、ゲームの時は選べば良かったが、この世界に俺が存在している場合どうすれば発動するんだろうか？とはいっても今現在の太史慈隊のステータスでも

『太史慈 + 太史慈隊 体力：7000 攻撃力：21010 防御力：15000 移動力：200』

このくらいはあるのでぶつちやけ、ただの賊程度では話にもならないですよ。

敵軍は川岸に着けた艦隊から続々とユニットを出している。

敵軍のユニットをランク別にするるとこんな感じである。

・ Lv1：『海賊団・小隊長』 & 『海賊下っ端兵数500人』の組み合わせが60組

・ Lv2：『海賊団・中隊長』 & 『海賊下っ端兵数1000人』の組み合わせが10組

・ L V 3 : 『海賊団・幹部』 & 『海賊下つ端兵数2000人』の
組み合わせが5組

【敵軍ステータス】

『名前：海賊団・小隊長 体力：560 攻撃力：640 防御力：
60 移動力：144 最大兵士数：500人』

『名前：海賊団・中隊長 体力：1340 攻撃力：800 防御
力：300 移動力：156 最大兵士数：1000人』

『名前：海賊団・幹部 体力：2500 攻撃力：2600 防御
力：1050 移動力：168 最大兵士数：2000人』

『名前：海賊団下つ端 体力：8 攻撃力：6 移動力：156』

となっている。

という訳で、今回の白髭海賊団の戦力を数値化すると、

L V 1 が 『体力：4560 攻撃力：3640 防御力：60』

L V 2 が 『体力：8340 攻撃力：5600 防御力：300』

L V 3 が 『体力：18500 攻撃力：14600 防御力：10

50』

となる訳である。

見て分かるとおり、体力と攻撃力は必ず抜けて高いが防御力は紙同然。これは『禁・三国恋姫』に出てくるほとんどのユニットにいえることだ。確かに戦いにおいて体力も攻撃力も必要だ。だが、それ以上に必要なのは防御力といえよう。何せ、そのユニットが生き続けるかぎり、その部隊は死なないのだから。

「とりあえず、最前線に行ってきますね。後のことはよろしくお願
いします」

「了解したよ、一刀くん。僕としても皆が住む建業の街を滅茶苦茶にされるのは望む所では無いしね。……では、太史慈さま、皆に聞こえるよう号令を」

俺は徐盛の言葉を聞き頷いた後、全軍の前に立った。そして、歩兵たちに向けて大音声を張った。

「全軍、武器を取れ！」

『ガアン』と銅鑼の音が鳴り響き、待機を命じられていた兵たちの視線が俺を捉えていく。

ちなみに銅鑼を鳴らしたのは、脇に控える徐盛である。

俺を見つめる兵たちに向けて、俺は建業の太守として、皆の命を預かる將軍として、可能な限り悠然と構え、朗々たる声を張る。

「これより我らは、街に迫り来る脅威、海賊団をここで迎え撃つ！」

先陣を務める自分の部隊と徐盛の部隊、街を護る及川の部隊に、戦いを始めて経験することになる元々は農民や商人だった者、そのすべてに聞こえるように俺は精一杯の声を張った。

「君が僕たちの《王》で本当に良かったと思うよ」と。

砂埃を巻き上げ、建業の街を襲わんと迫ってくる海賊たちの先陣がまず見たものは、燃える焔のような鮮やかな紅い鎧だった。だが、その鎧を身に纏う兵士は1人や2人ではない。目に映る敵兵全員がそれを着込んでいる。

その兵たちを率いるよう集団の前に悠然と立つ男がいた。

無能な指揮官が馬鹿な真似をしているのだと考えた海賊たちは意気揚々とその男に襲い掛かったが、その認識が間違っていたことに気付く。ただし、気付いたのは仲間が瞬きする間に殺されるのを見た他の海賊たちだ。

男に襲い掛かると同時に幾つもの首が刎ねられ、宙を舞い、ポトポトと地に落ちて荒野の砂で死に化粧を施される。

「突撃！」

何が起こったのかを理解できていない海賊たちの耳に、男が指揮する声が響いた。

男の後ろに控えていた紅い鎧を身に纏った兵士たちが、地鳴りを上げながら殺到する迫力に海賊たちは耐えられない。

男に対して恐れ慄いていた兵たちも、本能で勝てないと悟ったのか、

その場を一目散に退いていく。勿論、彼らに背を向けて。追撃する形で、紅い鎧を身に纏った兵たちが海賊たちを蹂躪していく。

「建業の街を狙った不届き者め、ここから生きて帰れると思うなよ
！！」

指揮官の男が放った言葉に海賊たちが悲鳴を上げる。

まだ、海賊団との戦いは始まったばかりだ。

四話

四話

白髭海賊団との戦闘の最中、僕は最前線で奮戦する大学での後輩である一刀くんの背中を見ていた。そして、思う。

「ふう……。一刀くん、飛ばしすぎだよ」と。

僕はこの身体（徐盛）の武器である『凍てついた戦斧』を肩に担いで溜め息をついた。何せ開戦して間もないというのに、太史慈隊だけで敵軍の約35%近くを葬っているのだ。彼が戦果を上げれば上げるほど、味方の士気は否応なしに上昇する。

「一刀くんは昔からそうだったよね。君の声や立ち振る舞いは、やけに人を惹きつけ好感を抱かせる。ふふっ、…僕もその1人」

その“人を惹きつける力”によって僕たちが生み出した兵ではない、この世界の人々である兵たちに作用し、人数的には劣っていたのに逆に彼らの士気を高める結果に結びついている。それがどうやって身についたのかは知らないが、この状況下において、指揮官として得がたい資質といえる。

「すかした顔し『ヒュンッ』てっつ『バギッ』」

僕は近くに寄ってきて斬りかかってきた海賊の1人の身体を横に真一文字に薙ぎ、上半身と下半身を分離させる。そして身体を回転させ遠心力をつけた一撃を斬り飛ばした上半身に叩き込み文字通り粉碎する。辺りに血が飛び散ったが、何のことは無い。僕自身、既に

何人もの海賊を殺してしまっていて、命を奪うことによる罪悪感や嫌悪感はほとんどない。もはや、元の世界に無事に戻れたとしても普通に生きていくことは不可能だろう。

敵兵が幾分か少なくなってきたなと感じた僕は、自身のDCPを確認した。案の定、敵の残存兵力は50%を切っていた。

「先輩として、少しは一刀くんの負担を減らさないかね」

僕は武器の戦斧を大きく振りかぶった。そして、精神を集中させ前を見据え言い放つ。

「吹き荒れる、氷結の結晶。碧風：衝破っ！！」

冷気を纏った風が戦場に吹き荒れ、一刀くんたちに武器を向けていた海賊たちの動きを止めた。その直後、風を受けた海賊たちの全身から血が噴出した。一刀くんが不思議そうな表情を浮かべこちらを見てきたので、とりあえず僕は彼に向かって笑顔でサムズアップしたのだった。

目の前で戦っていた海賊の全身から突然、血が噴出した。

一瞬にして血の池地獄を作り出した元凶を見ると、いやにイイ笑顔で親指を立ててサムズアップしていた。

「何かをするんだつたら、最初に言ってくれよ」

と、愚痴をこぼしている

来た。

「駄目だ、先輩。徐盛のステータスじゃ、瞬殺される。それよりも街に戻って軍全体の指揮を執ってください。正直、健治と及川の2人だと、心もとないですよね」

そんなことはない。2人とも俺とは違い優秀だ。健治がいなければ建業の発展はなかった。及川がいなければ、兵士たちは弱くて脆い装備で戦場に出なければならなかっただろう。けど、2人はまだ人を殺していない。

俺は自分の掌を見た。今日のこの戦いで随分と血に汚れてしまった。

1人目を殺した時は足が震え、胃の中のものを全て吐き出しそうになったが、2人、5人、10人、100人と殺した数が増えることに覚悟が決まっていくのを感じた。

俺は此処にいる。

この世界に存在している。

俺は建業という街の太守で、護るべき民が、大切な仲間が俺の後ろにいるのだ、と。

「一刀くん……分かったよ。けど、僕がやるのはあくまで代行。必ず戻って来るんだよ」

「こんなところで死ぬつもりはありません。俺がこの手で殺してしまった命も、俺の後ろにいる護るべき人たちの命も、全て背負っているんですから。戦いで死ぬわけにはいかない」

俺がそう言ったら、徐盛は目を剥き、そしてすぐに眼を擦った。

「ははっ、今一瞬だったけど、大勢の武官や文官を従えて指揮を出している一刀くんの姿が垣間見えた気がする。うん、君はまだ死んではならない。いや、こんなところで終わるはずが無い。僕が保障する」

「先輩……。ありがとうございます」

「それじゃあ、僕たちは街で君の帰りを待つことにするよ。スキル『瞬転法陣』発動！」

先輩がそう言うのと彼らの身体が光に包まれ消え去った。どうやら、味方の所へ一瞬で移動するスキルらしい。

「……一回、先輩たちのキャラクターステータスを見せてもらおう。スキルを把握していないと、何が出来るかわからないじゃないか」

「隊長、敵が来ます」

犬の面をつけた青年が俺に報告してきた。見れば、砂埃を上げて突進してくる物体があった。

「全軍抜刀！死力を尽くせ！だが絶対に死ぬな！奴に勝って、俺たちは全員で帰るんだ！」

「オオオオオオオオオオ！！」

俺たちは大地を力強く蹴り、向かい来る敵を迎え撃った。

兵たちの士気を高め、俺自身集中し心を静めていたのだが、敵である『海賊団・団長』の姿を見た瞬間、俺の頭の中は『全く理解できない』という異常事態の為にフリーズ寸前だった。

こんなことを予想できるか？

俺たちは命を賭けて戦ってきた。

街を、民を、家族を、仲間を護るために必死になって戦ってきたのだ。

そして、海賊団の団長が兵を率いずに現れた。

ここまではいい。

俺たちは覚悟を決めて、ここに残った。

だがしかし！

だがしかしだ！

ボディビルダーの如くに鍛え上げられた逞しい肉体“に”、白いビキニのトップスと禪、そしてマントのみを羽織った変態が現れるとか！

誰が予想できるかっ！！

アレの全体を視界で捉えた瞬間、怖気が走ったわ！

たぶん、無感情、無反応を誇る我が太史慈隊の精鋭もしっかりと後退りしていたから、俺の感性がおかしくなったわけではない。

代表として、敢えて言わせてもらおう。

「変態が来たぞー！！！」

「誰が変態じゃー！！！」

「お前に決まっているだろうが、変態じゃご不満なら化け物だよ！」

「んなああんじゃとおおお！誰が何年も掛けてやっと咲き誇った満開の桜の木をも一瞬にして散らせてしまうほどバケモノじゃとおおおお！！！」

「そこまで言うておらんわあああああ！！！」

俺の蹴りが白髭海賊団の団長の顔に炸裂した。『ズシャアア』と砂埃を上げて滑っていく変態を見据えた俺は、太史慈隊に命令する。

「総攻撃チャンスだ！起き上がれないくらいボコボコにしろ！！！」

「『『『『『了解！！！！！！』』』』』」

殺せと言わない辺り、俺自身分かっていたのかもしれない。この変態はどんなことがあって死なないってことを。

総攻撃中

「隊長、剣が刺さりません」

「とりあえず、殴ってる」

総攻撃中

「隊長、殴ったそばから回復してってます」

「見りゃ分かる。全員全力で攻撃だ」

総攻撃中

「隊長、隊員のほとんどが疲労で動けなくなっています」

「正真正銘のバグキャラじゃねーかよ！このオッサン」

「オッサンではない！漢女おとめじゃー！！」

「どの口が乙女っていうんだよ、このポケエエエ！！」

本日2発目の蹴りが変態の顎を捉え、そのまま宙を舞う海賊団の团长。そして落ちると同時に鳴り響く機械音。

【ピロリン 『白髭海賊団・团长』の『卑弥呼』を倒した】

俺はDCPに映し出された文字を見て、フラッと眩暈がした。

邪馬台国の巫女がなんで海賊をとか、何でこの時期にいんのとか、

色々と考えなければならぬことがあるんだろうけど、何故に女性であった卑弥呼がこんな筋肉達磨のオッサンになるんだろうか。

……まさか『禁・三国恋姫』では、名立たる武将が女性になった影で、元々女性だった武将が男性になってしまっているのか？

まさか、孫呉の二喬と呼ばれた大喬・小喬も、弓腰姫と呼ばれた孫尚香も男性化してしまっているっていうのか？

「知りたくなかったよ、そんなことはさー」

俺は膝を抱えて落ち込むのであった。

そんな中、俺の後ろでは太史慈隊がせつせと縄や鎖を使って、気絶したオッサンを拘束しているのだが、もうしばらくこうさせてくれ。必ず、復活するから。

五話

五話

白髭海賊団の団長である卑弥呼を名乗るオッサンを、捕虜として建業の街へ連れ帰った俺たちを待っていたのは祝勝の宴だった。広場の中心で音頭を取っているのは、変な関西弁をしゃべる悪友の韓当こと及川肇である。

「……………」

何も言い出せずにただただその光景を眺めていたら、『ガシッ』と脚に衝撃が走った。

いや、そのまま下を見ると街の子供たちが俺の脚に抱きついてきていたのだ。そして、『にへへ』や『ぼやん』とした満面の笑みを浮かべて俺の顔を見上げてくる。

「おお。我らの王が帰還したようや！建業の太守さまのお帰りじやー！皆のもの、胴上げじやー！」

文面が色々とおかしい。及川の奴、すでに酔っ払っついていやがるって、おお！？いつの間にか俺の周囲を屈強な男たちが囲んだと思った瞬間、俺の身体は宙を舞っていた。『ぼーん』、『ぼーん』、『ぼーん』……と、胴上げされること10回。俺は音頭を取っていた及川の隣に降ろされた。

「かずび、ほれ」

そう言つて、及川が俺に手渡してきたのは黄色のメガホンだった。

「太守さまの言葉、皆が待っているんやで。格好いいところを見せてやりい」

まあ、結局戦場では勝鬨をあげることが出来なかつたし、丁度良いか。そう思つて、渡されたメガホンを及川に投げ返す。及川は『おい、かずびー?』と不思議そうな表情を浮かべていたが、これは俺には必要ない。

民衆を見渡せば、誰もが口を紡ぎ、俺の言葉を待っているかのよう
に広場は静まり返っている。

俺は目を閉じて大きく深呼吸する。そして、密集した彼らの一人ひとりに届くように、その背後にいる兵たちにも届くように、精一杯の声を張った。

「諸君、此度この街を襲おうとした脅威は屈強なる兵士たちの手によつて退けられた。それも1人の犠牲を出すことなく。しかし、これからもこの街が危機に陥ることがあるだろう。だが、俺たちが此処にいる限り、この街に住む人々は必ず護る。護り抜いてみせる! だから、諸君らも我らを信頼し、力を貸して欲しい」

俺はここで一度、言葉を区切る。そして、ニヤリと笑つて及川がその手に持っていた杯を奪い取った。その中には並々と酒らしきものが注がれている。

「諸君、今は武器を捨て、杯を手を取れ! 今宵は皆で楽しもうではないか! 天に向かつて叫べ、街全体に聞こえるように叫べ、俺たちは今此処にいるっていうことを示せ! ……それではいくぞ! かんぱ

あああああいつつっ！！」

「……っかんぱーい！！」「……」

民衆は俺の掛け声で次々と酒を飲み干していく。子供たちも大人の真似をして、何かを飲んでいる。

そんな中、俺は杯に注がれていた酒を一気飲みしたつもりだったが、これってただの水じゃね？と首を傾げていた。すると苦笑いを浮かべた及川が寄ってきた。

「皆、ノリノリやなー。本物はこっちにあるけど、飲むか？かずぴー」

「いや、いい。というか、この宴を企画したのは及川か？」

「ちゃうで。ワイはただ盛り上げ隊長に任命されたから、音頭を取っていただけやねん。ほれ、あそこかあつちの方とか出店が結構出ているやろう？あれな、この街の商人やなくて篠塚が呼び込んだ、別の街や村で商いをしている連中なんやそつや」

「はー。健治は相変わらず凄いな」

「せやな。でも、今回の殊勲賞はやはりかずぴーやろ。DCPで確認しておったけど、50000の70%つまり35000の海賊と化け物みたいなステータスを持っていた海賊団の団長を倒したんやろ？凄すぎやで」

「あつ……。すっかり、忘れていた。ソレ、捕虜にして連れて帰ってきているんだわ。後で、尋問するから健治も誘って、俺の執務室に来てくれ。先輩には俺が直接言いに行くから」

「了解や、任せとき」

及川と別れた俺は建業の街の住民や兵たちとの激しくも楽しい宴の一時を過ごしながら、この街のどこかで飲んでいるであろう先輩の姿を捜し歩き、……迷子になった。迎えに来てくれたのは先輩の部下の忍者で、ちょっとだけ可哀想なものを見る目で見られた。面倒をかけてすみません。

「で、かずびーの執務室に来た訳やけれども。なんやねん、この口に出すのも憚られる肉の塊は？」

「今回の海賊団の団長、自称『卑弥呼』だ」

「うわあ、それはさすがにないって。おじさん、嘘は駄目だよって。そう言って健治は縄と鎖で簀巻きにされているオッサンの所へ行き、ポンポンと頭を撫でる。何でだろうか、猛獣を前にして『カツコイイ』とか『吼えて見せて』って言う元の世界の子供を思い出す。」

「ワシの名前は卑弥呼なのは最初からじゃ！お主ら、外史の管理者のひとりであるワシをこんな目に合わせて只で済むと思うな！」

「……外史？管理者？なんやそれ？」

及川が聞いた事の無い言葉を繰り返して言う。どうやら俺たちは当たりを引き当てたらしい。

そして、卑弥呼は踏んではいけない地雷を堂々と思い切り踏みつけたようだ。なにせ先輩と健治の目が卑弥呼の言葉を聞いた瞬間に据わり、口端がやや釣りあがったから。

「外史っていうと民間で書いた歴史のことだよ。つまり、三国志をモチーフとしたこの『禁・三国恋姫』というゲームの世界もまた外史のひとつに含まれるということ。だが、三国志をモチーフとした物語は何もこれだけじゃあない。漫画もあれば、小説もある。ゲームも様々な種類がある。つまり、人の数だけ外史は存在する。その管理者っていうことは、僕たちが何故ここにいるのかっていうのもわかるはずだよ。」

「なんじゃと?」

「恍けたり、隠そうとしたりする必要は無いよって。僕らは西暦20XX年の世界でこの世界観をもつゲームをやっていた身なのだからって。というか、何で僕らがこの世界に来る羽目になったっていうのさ?」

「そんなことがあるはずはない。主ら、名前は?」

「笹本京一郎」

「篠塚健治」

「及川肇や」

「北郷一刀」

「……ほんごう……かず」と？……ミスをしおつたな、管轄の奴め」
卑弥呼の縄を解き、話を聞くとこんな感じらしい。

・ この世界には『天の御遣い』と呼ばれる存在がいる。

・ その天の御遣いは俺たちプレイヤーとは違う勢力について行動する

・ 設定では俺たちと似たような世界出身らしく、未来（現代）の知識を使ってその勢力に有益な情報を与えて万事ことが上手く進んでいくようにするようだ

・ そして、問題なのはその『天の御遣い』の名前が『本郷一子』ほんしゅうかずというらしい

「つまり、管理者のニアミスで一刀くんと彼が扱っていたDCPと無線ネットワークで繋がっていた僕らもこの世界に招かれたっていうわけか。うん、ふざけたことを言うのはこの口かな？」

『ぎゅむー』と卑弥呼の口端を横に引つ張る先輩をどうにか押さえつけ、俺は彼に話の続きを促した。俺たちが知りたいこと。つまり、元の世界への帰還方法だ。しかし、彼の口から出た言葉に俺たちは啞然としてしまう。

「ワシは知らん。この世界でのワシの役割は、周回プレイのキャラクターがいる街を襲って、資金や街のレベルを下げるのがじゃから。元の世界へ云々に関しては管轄外じゃ」

その言葉を聞いた先輩と健治は米神辺りを押さえ眉を寄せ頂垂れる。

及川は場の空気を読んで俺の所に静かに寄ってきて、耳打ちしてきた。

「どうするんや、これから？」

「とりあえず、当初の予定通り、ゲームをクリアするつもりでやっていくしかないだろうな。もし、クリアしても帰ることが出来なかった時のことを考えて、この世界に骨を埋めることも視野にいれてやっていかないといけないわけだし、これまで以上に内政や外交に力を入れていく必要がある」

「そつやな。むしろ、最初から諦めておった方が、気が楽やわ。それにこの世界も結構住み心地がええし」

「それは同感だ」

「うむ。様々なご主人さまを見てきたが、お主のようなのは初めてじゃ。……よし、ワシに勝ったことじゃし、褒美としてコレをやる」

そう言った卑弥呼は禪の中に手を入れて、金色に輝く籠手を取り出した。

隣にいた及川は執務室の入り口へ避難してしまっている。

『さあ』『さあ』『さあ』と言わんばかりに迫り来る白きカイゼルヒゲと筋肉隆々の身体。俺はあつという間に部屋の隅に追いやられ、目の前には金色の籠手が差し出されている状態。

これを取ったら、人として大事なものをひとつ失ってしまいう気がする。そんなことを考えながらも迫り来る恐怖に耐えられなくなり、俺はソレを受け取ってしまった。

卑弥呼は頬を赤らめ、

「おお、ご主人さまがワシの金色の珠で作った籠手を…」

と言つて身体をクネクネさせる。

先輩や健治は完全に引いているが、及川は「うー、かずぴーはい奴やったのにー」と俺を煽るようにわざとらしく泣いている。

『プチッ』 俺の頭の中で何かが切れる音

フフツ、イイダロウ。メニモノヲミセテヤルオオオ!!

素早く金色に輝く籠手を装備した俺はスキルを即座に発動する。

「東方不敗が最終奥義！せきはアツ、てえええんきよおおおけえええん！」

『キュボツ』という音と共に自身のエネルギーと自然エネルギーの両方を凝縮した一撃は、壁と天井を軽がると破壊し、雲を切り裂き空の彼方へ消えていった。勿論、俺の目の前で頬を染め、身体をくねらせていた卑弥呼も一緒にだ。

俺は部屋の入り口で呆然と立っている3人を一瞥すると

「これは海賊団の団長が所持していた宝だ。そういうことにしておけ。これは命令だ」

と、いつもより若干低い声で言った。

3人は軍人がやりそうな敬礼をビシッと決めて

「了解しました」「」

と、言ってくれた。

フフフツ、卑弥呼。いいものをくれたね。お礼に今度見つけたら、所構わず、コレをぶつけてやろう。

フフフツ、クククツ、ハーハツハツハ！

「終わり方が何処かのラスボスみたいだよって、先輩」

獲得品

武器『金色の籠手』（攻撃力：5000 防御力：5000）

スキル（自発）『石破天驚拳Lv1』：エネルギーを凝縮した一撃を直線状に放つ。射線上の敵味方関係なく全ての武将と兵にそれぞれ5000の固有ダメージを与える、諸刃の剣ともいえるスキル。

六話

六話

文字通り山のように積まれた書簡を次々と処理している俺のところに、少し困惑気味の文官がやってきた。

「あの、太史慈さま。少々、お時間宜しいでしょうか」

「どうしたんだ？……まさか、まだ増えるのか？」

俺は文官との間に積まれたままになっている書簡を見て、最悪の展開を思い浮かべる。

「いえ、太史慈さまに謁見を求める人物がいるのです」

「俺に？」

「はい。何でも“軍師”として雇ってもらいたいとか」

「採用」

「は？」

「採用するから連れてきて」

「はあ…、分かりました。では失礼いたします」

俺に頭を下げて執務室から出て行く文官を見送った俺は背伸びをし

て骨を鳴らした。そして思う。

『やっと、この地獄から抜け出せる』と。

わざわざ軍師として雇ってくれと言ってきたいるのだから、一般人だった俺たちよりも兵法においても一芸を持っているだろう。それに軍師を希望しているのだから心配しなくても政務能力も高いはずである。

幸先いいな……………と、思っていた時期がありました。

「よろしくお願いします。太史慈さま」

俺の執務室に入ってきた少女を見るまでは。

妙に間延びした声、若葉のような薄緑の髪、眼鏡として本当に機能しているのか疑わしいものをつけた未来の孫呉の筆頭軍師、名を陸遜という。もちろん『禁・三国恋姫』の孫呉編に出てくるヒロインの1人だ。

俺はゴクリと喉を鳴らす。何故って？彼女を見る上で絶対に視界に入ってしまったわわに突った“モノ”の所為だ。

何がたわわなのかは言う必要も無いだろう。彼女が動くたびに揺れるアレのことである。振り返る。揺れる。椅子に座る。揺れる。呼吸する。揺れる。何かとつけてとにかく揺れる。何がって……言えるわけが無い。

この世界に来てまともに息抜きが出来ていない俺にとって、彼女のモノは凶悪すぎるっ！！

「どうかしましたか？太史慈さま」

そう言つて首を傾げる彼女。揺れる。

『ゴンッ』

俺は机に頭を打ち付けた。そして思い出すのは爺ちゃんがピンチに陥った時によく言っていた魔法の呪文。

「心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼しいいいいい」

俺は立ち上がつて壁に『ゴスゴス』と頭を打ち付ける。

「心頭滅却、煩惱退散、南無阿弥陀仏うつつうつ！」

しばらくお待ち下さい

額から血を『ドバドバ』流した状態で、陸遜に軍師として採用することを伝えた俺は早急に3人を執務室に呼んだ。そして、事の次第を報告したのだが、

「阿呆や。阿呆やと思つていたけど、これはさすがに拙いやろ」

ぐはぁ…

「素直に言えばもの凄く嬉しいんですけど、これって喜んでいいんですかって」

健治、お前だけでも幸せに…

「孫家が袁術の客将になった場合、彼女たちの独立がまた一步、遠のいたことになるね」

『サクツ』と先輩の一言が俺のガラスのハートに突き刺さる一言を放った。だが、俺にも意地があった。

あの後俺を待っていたのは、彼女の期待するような眼差し、ここを追い出されたら私には後がないんですと訴えかけるような雰囲気。俺が答えるのを躊躇っていると次第に涙が溢れそうになって……。

女の武器：泣き落とし

「なら、あの状態でどうしろと！」

「……太守としては間違っていない（んや・って・よ）」「」「」

「はい？」

及川は俺の肩に腕を回して話しかけてくる。

「事実、現在の建業における文官の中にはワイらに意見してくるような剛の者はおらん。それは一見、ワイらの好きなように改革することが出来るように見えるけどな、誰かがストップを掛けてくれへんと調子に乗ってしまうのが人間なんや」

さすがに心理学部に通っていた人間の言葉だけはある。

「僕たちは現代の知識を使ってなんとかやりくりしているけど、あ

こちらで常識なことがこちらでは非常識なんてことはザラにあるんですって。彼女が軍師として僕らの中に入ることによって、彼女の常識が僕らの非常識を正してくれる可能性があるんですって」

と、健治が俺の正面に立って身振り手振りを使って説明する。

「つまり、彼女が入ることによってメリットは多くあれど、デメリットはないんだよ。“僕たち”には」

「うう…、孫家には手痛いダメージがあるっていうことですか？」

壁に凭れ掛かったまま話をする先輩に俺たちの視線が集まる。

「それはそうだろうね。史実では孫策は呪術で、周瑜は病で亡くなっていたはずだから、陸遜の存在は未来の孫呉にとって必須のはずなんだよ。というか、長沙で『江東の虎』という異名で有名な孫文台というビッグネームが存命なのに何故新勢力でもある僕らの元に彼女は来たの？」

先輩に集まっていた視線が俺の方に集まった。彼女が俺たちの所へ来た理由。それは確か…

「自分の能力を思う存分に発揮できると思っから…だったかな？」

「へー」

「……」

「なるほどね。つまり、孫文台の所には有能な武官や文官が多いるので自分に活躍する余地が無い。ならば新進気鋭で将来有望かつ、

流星の如く江東の地に現れ建業の太守となり街を凄い速さで発展させていつている太史慈の元で、自分がどこまでやれるのかを試してみたいっていうところかな？」

結局、俺の判断は正しかったってことなのか？

孫家に対しては非常に申し訳ないことをしてしまった訳だけれども。

「この段階で陸遜がそういう風に考えたっていうことは、頭のいい連中は孫文台と太史慈を同格に見ているってことだね。荊州の東側に長沙がある以上、揚州にいる豪族は距離的に建業の太守である太史慈を選ぶだろうしね。江東を孫文台と二分にする存在として」

ふふふつ、と不気味な笑いを洩らす先輩の姿に怯える健治を慰めながら、俺は彼に尋ねた。

「これからどうするんですか？」

「ん？今まで通り、領地を広げていくだけさ。5万という途方も無いくらい強大であった白髭海賊団を完全に退けたって言う話は揚州全体に噂として広まっているから、何もしなくても同盟やら臣下として加えて下さいって言うてる輩はこれからどんどん増えていくと思うよ」

なんだかことが大袈裟になってきた気がする。って、最初からかうん、諦めて仕事をしよう。

「ある程度戦力が集まったら、山越賊を取り込むのもいいかもしれないな。一刀君なら、単騎で……」

先輩がなんだか恐ろしいことを話しているが聞こえない。あー、聞こえないっつら、聞こえない！！

七話

七話

「どうしてこうなった」

俺の思いはこの一言に集約される。

先日の陸遜加入の際に先輩が言っていたことが本当に起こり、規模の小さな村々はさつさと「貴方様の支配下においてください」と贈物を持参し、揚州の最東端に位置する漁業の街である呉や会稽の太守たちがこぞつて建業を訪れ、同盟を申し込んできた。戦力的には完全にこちらが2つの街の兵力を足したものを完全に超越しているため、軍門にいれてくれとお願いされているようなものだった。

それだけなら、俺の執務室が書簡に埋め尽くされて締め出されるだけで済んだであろうに、なんと俺は現在、三越族と対峙している。本当に、どうしてこうなった。

- ・ 昨日分の仕事を終わらせて、久しぶりに寝台で横になった俺
- ・ 起きたら縄でグルグル巻きにされ荷台の上に転がされていた
- ・ 状況が分からずに目を白黒させていたら、見覚えのある忍者の服装をした人が…って、先輩の部下の人じゃん!?

・ 無造作に投げ渡される件の『金色の籠手』。これを見るたびに白きカイゼルヒゲを思い出し、心の中で怒りの炎がつつつと燃え上がるのを感じる

・ 縄が解かれ、「それでは頑張ってください」と告げた忍者の人は目にも映らない速さで俺の前から去っていく

・ 仕方なく籠手を装備したら、俺を取り囲むようにして現れる目つきがヤバめなお兄さんたち

・ 状況が分からないがファイティングポーズを取る俺 イマココ

「手前、最近建業の太守になっていい気になっていやがる太史慈っていう奴だろ。はん、1人のこのこ乗り込んでくるとはいい度胸だ。まずはオレが相手してやるよ」

そう言っただけで現れたのは空色の髪と爛々と輝く金色の瞳が特徴の少女。その拳には濃い青色の籠手が装備され、身体には所々戦や鍛錬でついたと思われる大小様々な傷跡が見える。

「オレの名は、厳虎。手前の名前はいいぜ。どうせ、ここで骸になるんだからなあああ!!」

素早い動きで俺に迫ってくる少女。そして、その勢いのまま左足を思い切り踏み込んで体重を乗せた一撃を俺の腹部に向けて放った。

「……………」

「……………?」

それから10秒くらい経った後、髪や服が汚れるのもかまわずに地面をごろごろと転げまわって悶絶する少女。

周囲を囲んでいた男たちの顔がにやにやした表情から一気に青白くなるのを俺は見た。

「て、手前の身体は岩かなんかかよ!」

「ただ単に能力が違ステータスうだけだろ。大体、右ストレートっていうのはな、こっ放はなつんだよっ!」

俺はここでふと思った。普通のパンチを放った所で、こいつらが納得するとは思えない。有無言わずに黙らせる方法……。俺は太陽の温かな陽光を浴びて光り輝いている金色の籠手を見た。

そっだ、あれをやるっ。

俺は自身のエネルギーと自然エネルギーを練って錬って煉り固めるイメージで集めていく、そして集めたエネルギーを右手に収束して放つ。俺にとってはただこれだけのこと。

ただし、俺の周囲でこの成り行きを見ていた者たちは全然違っちがっつて見えていた。

なにせ、俺が突き出した右腕から発射された光が地面を抉り、海を割り、最終的には『ドドン』と弾け飛んだのをその眼でみる事になったからだ。

「これが、俺の必殺技『石破天驚拳』だ。ただの右ストレートだけでもこっこうういったことが可能な……っつて、どうしたんだお前ら!？」

いつの間にか俺を取り囲んでいた男たちは綺麗に統率の取れた状態で整列し土下座していた。

無論、彼らを率いていた少女も額を地面に擦り付けそうな勢いで土下座している。

「師匠！オレたちを、いやオレを弟子にして下さい！よろしくお願います！」

「「「「よろしくお願います！！」「」「」」

「お、おう。任せろ」

彼らの勢いに飲まれて咄嗟に了承してしまったが、果たしてよかったのだろうか？

・ 山越族の特徴。強者の言うことは絶対。かつ山越族の女性は己より強い雄に惹かれる。

『名前：蔽虎 体力：1900 攻撃力：2800 防御力：16
50 移動力：182 総兵士数：1000人』

『名前：山越族・若人集 体力：14 攻撃力：16 移動力：125』

『名前：蔽虎隊 体力：15900 攻撃力：18800』

【ピロリン 『蔽虎隊』が『太史慈軍』に加入した】

蔽白虎隊が張ったキャンプで一夜を過ごしていた俺は、鎧の間に挟

まっていた紙を見て頬を引き攣らせた。

『指令書』

山越族の現主要メンバーである黄乱、尤突、藩臨、費棧、厳虎、嚴興の6人をぶつ飛ばして、配下にして連れ帰って下さい。それで山越族の問題は解決です。

徐盛より』

「あの方は鬼か」

厳虎隊に連れられて山越族の族長が治めている街にやってきた。

当然山越族の人間たちは部外者である俺を上野動物園に連れて来られたパンダの如く、物珍しそうに見ている。

「師匠、ここから先がオレみたいな將軍が住んでいる地域です。気を引き締めて下さい」

厳虎の言葉通り、俺を射抜かんと鋭い視線を向けてくる者がいる。俺が視線を感じたほうを見るとすぐにその姿を隠してしまうのだが……。すると突然、厳虎の歩みが止まった。正面を見ると、濃い紫色の髪を束ね、大きな槌をその手に持つ妙齡の女性がいた。雰囲気というに『禁・三国恋姫』の劉蜀ルートに出てくる顔厳みたいな。

「何をしておる？ 昴よ。……そして、後ろの男は誰じゃ？」

「千代の姐御！」

「その呼び方はやめいと言っておるのに」

敵虎はその女性と一言、二言会話し、こちらに振り向いて笑みを浮かべながら駆けてきた。俺はその健気な姿に、犬耳と尾を生やした彼女の姿を垣間見た。間違いない、敵虎は忠犬属性だと思う。

「兄貴、千代の姐御が話を通して、族長に会わせてやるって」

「そ、そうか。ありがとうな」

俺はそう言っつて、彼女の頭を撫でた。すると、

「く、くうくん」

と、敵虎は喜びの声を上げるのだった。大丈夫なのか、これで……。非常に不安に駆られる俺であった。

……

……

…

「不安的中かい！」

俺が連れてこられたのは、ローマにて競技場として使用されていたような円形のコロッセオ。俺はそのコロッセオの中心で観客席に座っている大勢の山越族の視線を浴びせられる。俺は其中で装備している籠手の具合を確かめる。

「くそつ、これで死んだら先輩を呪ってやる」

そんな愚痴をこぼしながら俺はその時を待っていた。その時、客席に詰めかけていた山越族の人々の声を上から塗りつぶすように、けたたましい銅鑼の音が鳴り響いた。と同時に、ものものしい装備の兵士たちが現れて、ぽつかりと空いていた上の方の客席を埋め始めた。

「……………なんだ？」

いきなり完全武装した兵士たちが現れて、最初から観客席に座っていた山越族の人々は困惑している。観客たちの間に少なくとも動揺が走ったのはいうまでもないようだ。

「静まれ！みなもの者、静まれ！」

空いていた客席の上から3分の2が兵士たちによって占拠されたころ、兵士たちの叱咤とともに、長く艶やかな黒髪を首の後ろ辺りで束ね、黒鞆の剣を佩いた妙齢の女性が現れた。その毅然とした振る舞いは他にいる兵士たちとは格が違うという事が一目で分かる。

耳を澄ますと「ハンリンサマ」という声が聞こえてきたので、山越族を仕切る主要メンバーであることは間違いがなさそうだが、彼女が現れるのはどうやら珍しいことらしい。どうにも話を聞いていると彼女は族長を護衛する役職についているそうだと。ということはつまり…。

俺は、藩臨の頭上のボックス席を凝視した。

いかつい取り巻きを連れて現れた彼女は眉を寄せ、目を閉じたまま

で何か一席口上をぶつけることもなく、兵士たちの方からもそれ以上を語るようなことはなかったが、観客の目がそちらに向いてしまっているのも言うまでも無いってことだ。あの御簾の向こう側に、山越族の長がいるということだろうということだ。

で、俺の現在の状況なのだが……

「ぐう……」

「があああ、いてえ、いてええよおお」

「じほつ、じほつ」

山越族の男連中を相手に無双しているところだ。

最初は虎とか猪とかが出てきたんだけど、俺が睨むと服従のポーズを見せるんで頭を撫でておいた。

それに納得がいかなかった観客の若い男たちが「俺たちがやってやるぜ」といった雰囲気而降りてきたので、全員に一発ずつ拳を叩き込んだ。結果はこの状態。鎧や兜をつけずに俺の所へやってきたもんだから、被害は尋常ではない。しかし、観客のボルテージはかなり高い。

俺にやられた男衆がこんなにボロボロになっけていても「大丈夫か」って言う一言もないのは、この山越族も能力が女尊男卑なのかもしれない。が、何だか気に食わない。

こいつらは一度俺と戦い、俺の強さを知った。その上で立ち上がり、俺を倒そうと迫ってくる。まあ、返り討ちに行っている俺が言うのも

なんだけど、根性はあると思うんだ。少なくとも、安全な観客席で俺たちが戦うのを肴に飲んでいる連中に比べれば。

「くそお……」

俺を倒すために降りてきた青年が膝をガクガクと揺らしながらも立ち上がり、両拳を上げファイティングポーズを取るのを見た俺は彼に話しかけた。

「なあ、なんでそこまで必死になって戦うんだ？」

「部外者であるお前に言うまでも無い」

「観客席を見る、お前たちを肴に酒を飲んでいるような奴等だぞ。悔しくないのか？」

「……………」

青年は俺の問いに黙り込んだ。周囲を見渡せば、俺に倒された連中全員が痛み以外の理由で顔を歪め、唇を噛み締めている。

「山越族は強者の言うことは絶対……だったな。だが、本当は違うんじゃないのか？男という理由だけで、一兵卒以上になれないとか……って、そんな驚いた表情をするっていうことはマジか!？」

「う、ああ。その通りだ。あそこに見えるだろ」

そう言って青年は、山越族の長がいるであろうボックス席を指差していた。

「今回、族長となった奴が『私の部下は女のみでいい。男は壁にでもなつていればいいんだ』という方針らしく俺たちには出世の道がないんだ。俺には故郷に病で床に臥せる両親がいて、どうやってでも金を稼がないといけないのに」

「…………お前らも？」

俺は周囲にいる男衆を見て言った。返ってきたのは強い頷きだった。

「だったら、齒向かえばいい。そんなの族長じゃないってな」

「それが出来たらしている！だが、族長を護る護衛官の藩臨さまは我らのような奴等が1000人、2000人集まったところで倒せる人間じゃないのだ！」

「ちよつと、待て……」

俺は懐からDCPを取り出して、藩臨のステータスを確認する。

ちなみにこれもれつきとした戦争パートのようで、目の前にいる青年の名前は『悟道』というようだ。ステータスも中々高い。先日、俺の弟子となつた巖虎の約1.5倍の能力を持っていた。

『名前：悟道 体力：2500 攻撃力：3400 防御力：2500
移動力：150 総兵士数：1500人』

鍛えればまだまだ伸びしろがありそうだ。

で、肝心の藩臨のステータスだが、なるほど悟道の言うことも分かるんでもない。確かに凄い能力だ。

『名前：藩臨 体力：5000 攻撃力：12000 防御力：10000 移動力：300 総兵士数：0人』

ステータスを見終えた俺はDCPを懐の中に入れなおして、大きく息を吸い込んだ。そして、コロッセオにいる全ての人間に聞こえるように大音声で言い放った。

「族長の護衛官である藩臨！お前に一騎打ちを申し込む！」

俺の放った言葉にコロッセオにいた全ての人間が動きを止めた。渦中の藩臨は今まで閉じていた目を『クワツ』と開き、燃え盛る紅蓮のような瞳を露にする。そして

「……………承知した」

と言って立ち上がったと思ったら、その場から忽然と消えていた。

「……………うおっ！？……………」

俺の後ろにいた男たちから驚嘆の声が上がった。つまり、彼女はあの一瞬であそこからここまで移動したということになる。なるほどね……………。

「これは厄介そうだ」

「お前の力……………私に見せる！」

そう言っただけで彼女は黒鞘から彼女の瞳と同じ色をした剣を抜き、俺に切りかかってくる。

振り下ろされる藩臨の剣を正面から受け止める。剣と籠手がぶつかり合って火花を散らす。

「やべえ、卑弥呼にもらったこの籠手じゃなかったらまともに受け切れなかった」

俺は素直にそう思った。

なんと強烈な一撃か。3周目のチートというゲームの加護を受けた俺の両腕をもつてしても、その一撃を受けると同時に体中が痺れるような衝撃を受けた。しかし、俺も建業という街を治める太守、ただではやられない。彼女が剣を構えなおす一瞬の隙について、彼女の肩に一撃をいれようとするも寸前で避けられてしまった。

「……ちっ」

「……っっ!？」

藩臨は振り回すよう強引に剣を振るう。俺はそれを左腕だけで受けて、右拳を彼女に向かって放った。しかし、彼女は凄まじい速さで剣を構え直し俺の一撃を防御することに成功した。それはまるで剣ではなく小枝を扱っているのではないかと思わせるほど、流麗にして迅速な行動だった。

俺と彼女の二騎打ちは果てしなく続く。

最初は野次を飛ばしていた観客だったが、いつの間にか静かにことの成り行きを見守っていた。武に覚えがあるものは固唾を呑んで見守り、山越族の民は最強の護衛官である藩臨の勝利を信じて祈るよ

うに見ている。

「……はっ……はっ……はっ。……お前、強い」

「うん？ありがと。でも、そろそろ決着をつけようか」

「……承知した」

藩臨は剣を正眼に構えた。

俺は両手を向かい合わせるようにして構え、自身と自然エネルギーを錬りこむ。

「吼える、竜吼砲！」

「石破つ、天驚拳！！」

大勢の山越族の人間が見守る中、俺と藩臨が放った攻撃はコロッセオ中央にてぶつかり合い、一瞬拮抗したかと思っただがそれはすぐに終りを告げた。俺の『石破天驚拳』の光の濁流が藩臨の『竜吼砲』と彼女の身体を丸ごと飲み込んだ。そして、彼女の後ろの観客席にいた人間全てを巻き込んだ。

光が消えた後に残されたのは、膝をついて俺を見上げる彼女と、観客席でぐったりとしている観客たちと兵たちだ。族長がいたと思われるボックス席は吹き飛んでしまっただけで何も残っていない。

「……私の負けだ。……殺すがいい」

自身の剣を俺に差し出して目を閉じる彼女の姿は、毅然としていて

かつ凜々しかつた。こんな彼女を簡単に死なせるわけにはいかない。

「蔵虎に聞いた。山越族は強者の言うことには絶対に従わなければならぬ、と。ならば命じよう、藩臨。俺の手足となり戦場にてその力を発揮せよ。それから悟道やお前たちも俺が治める建業の地へ家族を伴って来い。悟道、お前ならば、我が軍の將軍になることも夢では無いだろう」

「……承知」

「御意！」

「くくくくはっ！」「くくくく」

【ピロリン 『藩臨』と『悟道』、『山越族・若人集』が仲間に加わった】

コロッセオから出た俺を待っていたのはイイ笑顔を浮かべている蔵虎たちだった。

「お疲れ様でした、師匠！」

そう言って手拭いを手渡してくる蔵虎。その後ろには、先ほど一騎打ちを行い俺の臣下となった藩臨や悟道といった人間の他に、数人が各々立っていた。

俺が視線を向けると一様に膝をつき、名をあげる。

「我が名は黄乱！此度の戦い、見事じゃった。ワシをお館さまの軍門にいられてくれい！」

「ボクの名は厳興。貴方の強さに憧れました。姉と同様、私も弟子にして下さい！」

「妾は尤突。正直、男の下に就くなんて気に食わないけど、貴方のところで世話になるわ」

「ふわわ、乃愛しゃん！？そんなことを言って廻しゃないで下しやい！わ、私は費栈でしゅ。力は非力でしゅが、軍師として役に立ちたいと考えています！よろひゆくおねがいしましゅ！」

そう言つて俺を見上げてくる4人に加えて、藩臨や厳虎、悟道や男たちといった面々が俺の返事を待っている。

先輩に頼まれていた指令はこれで達成なのかな？

まあ、いいや。これからのことは建業に帰ってから考えよう。

「俺の名は太子慈、字は子義だ。お前たち山越の民は今日を持って俺が死ぬまで一蓮托生となった。難しいことや無理難題なことは命じない。お前たちは全員家族だ。俺が生きているかぎり、お前たちは全力で護る！だから、お前たちも俺を信頼し、その力を貸してくれ！」

「御意！！！！」

こうして、山越族を臣下に加えるという仕事を終えた俺は、新たに仲間となつた將軍候補6人、軍師候補1人、山越族の兵士2万をつ

れて帰路につくのであった。

八話

八話

山越族の民を仲間にする事が出来た俺は、大手を振って建業の街へ帰還した。

いつも通りの賑わいを見せる建業に街並みや大勢の人たちを見て、
敵虎や黄乱といった面々が感嘆の声を洩らした。

見知らぬ一団を見て、首を傾げる人たちもいたが、率いているのが俺だということが分かると会釈して去っていく。

しかし、そんな穏やかな空気も完全武装の警邏隊が現れたことで崩れ、一気に緊張が高まった。当然、仲間たちを護ろうと藩臨が剣を抜き、尤突が黒い帯を束ねたものを取り出した。敵虎や敵興も拳を握り、悟道もファイティングポーズを取り、あつという間に一触即発と呼べる空気になったため、急いで俺が双方を治めようとした時、

「お帰りなさいませ、太史慈さま。遠征、ご苦労さまです」

そうやって、蒼い鎧を身に纏った青年：徐盛が俺の前まで来て頭をたれた。その姿を見た警邏隊の人たちもすぐに武器を地面に置き、膝をついた。えーと、『部下がいるときは、公私をしっかりと分けること』だったな。

「うむ。俺の後ろにいるのは將軍候補6名と軍師候補1名、それと山越族の民2万だ。早急に家屋の手配を頼む」

「御意です。誰かある!」

「はっ!」

徐盛の呼びかけで現れたのは、大きな弓を背負った少年だった。俺は面識の無い少年を見て首を傾げたが、俺の側に控える形となった徐盛、つまり先輩が耳打ちしてくれた。

「彼の名前は丁奉。一刀くんの噂を聞いて出稼ぎに来た子でね。中々おもしろいスキルを持っていたから、今は僕の副官として動いてもらっているんだ」

おもしろいスキル?と聞いた俺はDCPを操作しようと思ったが、今の状況でそれは拙いかなと考え直し、城についてから確認することにした。ちなみに俺が先輩と話している間に山越族の民は丁奉に連れられて、健治率いる田中隊によって開発がどんどん進んでいる建業の西側に向かって歩みを進めていった。

「俺がいない間に何か変わったことは?」

「特には。ただ細かい所で言えば、魯肅が少し暴走したってことぐらいかと」

「気になる言い方だな。あいつの“少し”ってどのくらいなのか分からないんだが」

「簡単に言いましょう。『病院』と『学校』を建てたみたいです」

「……それは、また。思い切ったことを」

「詳しい話は、城に戻ってからということだ」

「そうだな。……君たちは、俺たちについて来い」

未だに周囲を警戒する藩臨たちに向かって俺はそう言って、返事も聞かないまま城に向かって歩き出した。

玉座に座った俺は大きく溜め息をついた。

「はあ、やっといつもの調子でしゃべれる」

「ははは、お疲れー」

俺の側に控える先輩が渋い声を掛けてくれるが、今回俺が山越族の所まで遠征に行く羽目になったのは彼の所為だ。

そのこともあってジト目で見るが、先輩はどこ吹く風と知らん振りを決め込む。

「師匠。その人は誰ですか？」

生徒が教師に向かって質問するように右手を『シユバツ』とあげて尋ねてきたのは、先輩に対して疑惑の目を向ける敵虎である。見れば、藩臨や悟道といった面々も先輩に対して鋭い視線を送っている。

「彼の名は、徐盛。立場は、……。何て言ったらいいんだろう」

「そうだね。僕が一応兵を率いる者ではあるものの、主に行っているのは他国の情報収集と領土内の農林水産物の管理ってところだね」

「前者はわかるが、後者はどんなことをやっておるんじゃ？」

眉を顰めながら尋ねてきたのは、黄乱である。質問をしたはずの蔵虎とその妹である蔵興は先輩の話聞いても、意味が理解できなかったのか首を傾げている。

「簡単にいえば、太史慈さまが治める領土内の民全員に「食料」を供給するっていうこと。僕がやっているのは、その枠組みを作るっていうことだけだね。興味があるなら、あとで詳しく説明するよ」

「うむ。頼む、その説明を聞くのはワシと…費棧でよからう」

「はいでしゅ」

黄乱が辺りを見渡して、目が合った費棧に声を掛けた。費棧も気になることがあったのか、黄乱の目配りにすぐに反応した。

「徐盛のことはもういいかな。じゃあ、次は魯肅だ」

藩臨たちの視線が健治を捉えた。健治は、最初いきなり向けられた視線にたじろいだだが、すぐに持ち直した。

「……徐盛に聞いたぞ。俺がいない間に、病院と学校を作ったんだってな？」

「まあ、結局の所そうなたっていうか、僕もこんなトントン拍子に進むとは思っていなくて」

そう言って、健治は自分の隣でにこにここと笑みを浮かべる陸遜を見

た。その後、小さな溜め息を吐いた健治はそのまま話し始めた。

「病院についてですが、最初は医術の心得がある者を集めていただけなんですって。それこそ、人体に詳しい者、薬を扱う者、薬草に詳しい者、風土病を研究している者、それから産婆とかありとあらゆる知識を持つ人たちを集めて、情報の集約化を図ろうとしたんですが、その時に丁度近くの村で疫病が発生したと報告を聞いたもので、まあ後はご想像にお任せしますって」

それだけの医術に心得がある人間が揃っていたら、何とかできるんじゃないかって思うよな。

こうやって、健治がここにおいて病院を作っている以上、その疫病をなんとかすることが出来たのだろう。

「ちなみにこの病院は、国庫で運営することになったのであしからず」

「って、おいつ！」

「大丈夫ですよ、せん……太史慈さま。現在の建業は金回りがいいですので、問題ありません」

「そこから先は、私が説明しますね」

今まで静観していた少女はその間延びした独特なしゃべり方で皆の視線を自分に集めた。彼女の隣で、しゃべり終えた健治が額に掻いた汗を、手拭いを使って拭いている。余ほど緊張していたらしい。

「学校に関してですが、元々太史慈さまが建業の太守になられた際に決めた税収の引き下げが建てる要因のひとつになったと思われ

ます」

引き下げって言うてもなあ。他の州と同じように一定額まで引き下げただけなのだが？

そりゃあ、俺の前の建業の太守はとても見栄を張る輩だったらしくて、民に重税をかけて貧困化させ、自分達は悠悠自適な生活を送ってきていたらしいので、その頃に比べれば税収は低くなっただろう。

「まず、税収が引き下げられたことによつて、生活に必要なものを買つても自由に出来るお金が各家庭に少なからず出来たことにより自分の好きなものを買えるようになりました。そこで健治さまが目をつけたのが、娯楽用品です。子供向けに木を加工して作った玩具を売つてみたり、女性向けに髪飾りや首飾りといった装飾品を作つてみたりされていたんですが、なんといつても極め付きは本ですっ！！」

はて、今彼女は健治のことを『健治』と呼ばなかったか？

陸遜は徐々に鼻息を荒くしながら話しを進めるが、その横で名前を呼ばれた健治がソワソワというか、隣にいる陸遜から少しずつ距離をおいていつているような気がする。

「子供向けに描いた絵本も分かりやすくてよかったです、なんと言つても素晴らしかったのはちゃんとした物語になっている小説というものです！『忠臣蔵』とか『十三人の刺客』とか……はあはあ、内容を思い出しただけで身体が火照つてしまつて、あらく？」

ある程度、陸孫から離れた健治だったのだが、身体をモジモジ始めた彼女が隣に健治の姿がないことに気付くとキョロキョロとあた

りを見渡し、柱の影に隠れようとしていた健治を見つけロケット弾の如く駆け出し、彼の首根っこを掴んで引き摺りながら元の位置に戻ってきた。

その際の健治は誰かに助けを求めるように、とても情けない顔になっていたが。

「ともかく、本が素晴らしい訳です！これは皆さんが読む価値があると思うのですが、困ったことに民の中でも文字を読める人間が僅かです、本屋には在庫がいつぱい残った状態だったんです。こんな素晴らしい本を読めない人がいるんだったら、読めるようにしてしまえばいいと思って、『ちらっ』健治さまの机の中で埋もれてしまっていた『学校へ案』を作ってしまったおうと考えた訳です」

うん。理由がひどく個人的だが、この際どうでもいい。

学校が出来るということは、民が知識を得るということだ。これによって、こちら側は優秀な人材を見出すことが出来、民側は出世のチャンスを得ることが出来る。学校を運営するに当たって、教師とか知識人を集めないといけないが、そこら辺は健治の得意分野だろう。

学校を作る上での問題点は、民が知識を得ることによって起こるかもしれない反乱といったところか。今のところ、給料とか福利厚生とかに力を入れているがどこから不満が湧き上がるか分からない。気をつけておかないといけないな。

「健治さま、一昨日夜伽に行った際に書きかけの原稿を見かけたんですけど、あれは完成しましたか？」

「くくくくぶふっ!?!」「くくく」

「ちょっと、穩!?! ななななにを、いきなり!?!」

真つ赤になつて慌てる健治とマイペースな陸遜を見て、俺は思った。

「リア充、氏ね」

「せんぱああああいつ!?!」

しまった。口に出して言ってしまったらしい。しかし、悔しいな。後輩が先に卒業してしまうとは…。

ふとあることが気になった俺は先輩に目配せした。すると、彼はすぐに首を横に振った。つまり、仲間。次に及川に目配せすると、彼もまた首を横に振った。ふっ、抜け駆けしたのは健治のみか。

健治に対してのお仕置きは何がいいかなと考え始めた、その時

「はい! 師匠」

「ん、どうしたんだ。敵虎」

「『よとぎ』ってなんですか?」

彼女が発した質問によって、玉座の間の空気が凍ったのは言うまでも無い。

その質問を聞いた健治は咄嗟に陸遜の口を手で押さえた。それが懸

命だと思つ。

俺は、保護者的立場にある黄乱に目配せした。しかし、彼女はすぐに視線を外しやがった。

蔵虎と蔵興は、答えてくれるだろう人を探してキョロキョロしながら辺りを見渡している。

夜伽がどうのとか話せる空気ではないので、俺は意を決して誰かに丸投げする気満々で話しかける。

「あ……。蔵虎、その質問はこの軍議が終わったら、一番信頼している“同性”の人に聞いてくれ」

「え？はい、師匠命令ならば！よろしく、お願いします！藩臨さま」

「………よりによつてか」

必死に目を合わせないようにしていた山越族最強の剣士はがっくりと頂垂れた。

俺はてつきり剣一辺倒だと思っていただけ、夜伽はどういうことなのか知っているんだな、彼女も。

「………私は族長の護衛官だった。………来る時は2桁の日もあった」

俺の考えていることが分かったのか、彼女は教えてくれたが、うん。

「かずぴー。その族長は？」

「たぶん、お空の上だ」

「ならええわ」

なんて羨ま……。いかん、いかん。敵虎の変な質問の所為で意識がかなりずれてしまった。

「太史慈さまも、山越族の方々も長旅によって疲れているでしょうから、今回の軍議はここまでということにしましょう。部屋の方へは侍女の者たちに案内させますので、どうぞ、おくつろぎ下さい」
そう言つて先輩が侍女たちを呼ぶ。けど、彼が呼んだ彼女たちは侍女であつて侍女ではない。全員、先輩の部下である忍だ。足運びが少々独特なため、藩臨や黄乱といった面々は気付いただろう。

で、玉座の間に残つたのは俺と先輩と及川の3人。健治は陸遜に連れ送られてしまった。

「しかし、健治が一番乗りか」

「まあ、ムードもロマンチックさも、ほとんどなかったらしいよ。なんせ、健治くんは襲われた側だから」

「彼女は本を読むと興奮する性質（たち）のようだな、篠塚はなんの気兼ねもなく、彼女に自分が書いた小説の感想を求めたようなんや。つまり篠塚は腹すいた狼の前で、自分に調味料をかけてしまった憐れな子羊やつたちゆうわけや」

「それを聞くとあまり羨ましくないな」

「確かに、最低でも主導権だけは握りたいわな」

「「同感だ」」

しかし、これで揚州は完全に俺たちが支配下に置いてしまった訳だが、『江東の虎』はどんな動きを見せるのかね。

同盟か？不可侵条約か？それとも、奪い取るつもりなのか？

どんな事態になってもいいように、しっかりと準備だけはして置く。

明日は、軍部の編成だな。仲間割れはやりたくないし、まずは交流戦といった所かな。丁度、軍師も2人いるし。紅白戦にしてみるのも面白いかもしれないな。

八話（後書き）

お気に入り登録86件
皆様、ありがとうございます。

九話（前書き）

登場人物設定&ステータス（その1）

九話

九話

あの後、先輩や及川と別れた俺は自室に戻り、ふかふかとまではい
かないが自分の寝台で横になっていた。

今日一日だけは政務を行わなくていいように、先輩と健治が分担し
て終わらせておいてくれたらしい。でも、俺としては明日、現在建
業にいる全ての武将と軍師で交流を目的とした模擬戦をやりたいと
考えている。

せめて、机の上に載っている書簡は片付けておくかと思立ち上が
った所で、懐からDCPが床に落ちた。俺はそれを無造作に拾い上
げ、机の上に置いた。

「そういえば、丁奉っていつていたっけ、あの少年」

俺は昼間に会った大きな弓を担いだ少年のことを思い出した。先輩
が「おもしろいスキル」と言っていた以上、何かあるんだろかなと
思い、俺は椅子に腰掛け机の上に置いたDCPのスイッチをいれた。

画面に映し出されたのは編成パートという文字。

俺は十字キーを押して、仲間の項目を選び映し出される情報に目を
通した。

【太史慈軍】

【武将・兵士ステータス】

名前：太史慈 字：子義 真名：一刀 資金：136750 670

体力：6000 攻撃力：25000 防御力：20000 移動力：2000

兵士最大数4200人 5000人

武器：金色の籠手（攻撃力：5000 防御力：5000 スキル：石破天驚拳）

スキル（自発）

『大号令Lv3』：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

『石破天驚拳Lv1』：エネルギーを凝縮した一撃を直線状に放つ。射線上の敵味方関係なく全ての武将と兵にそれぞれ5000の固有ダメージを与える、諸刃の剣ともいえるスキル。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

名前：太史慈隊 兵種：強化兵 動物の顔を模した面をつけている。犬の面をつけた青年がリーダー格と思われる。

体力：1000 攻撃力：1000 移動力：1000 コスト：1000
0（1人につき）

スキル（自動）

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「山越族のイベント？で結構な資金が溜まっていたんだな。よし、今のうちに兵士最大数を増やしておこう。おっ！ギリギリだけど、5000人までいけるな。よし、決定っ」と

名前：徐盛 字：文響 真名：京一郎 資金：28900

体力：3000 攻撃力：7200 防御力：4600 移動力：2000

兵士最大数：1500人

武器：凍てついた戦斧（攻撃力：4000 防御力：2000）
スキル：碧風衝破）

スキル（自発）

『挑発Lv1』：3ターンの間、前線に武将が常にいる。作戦が特
攻固定

『碧風衝破LV3』：戦斧を高速で振り回すことによって発生させた冷気を伴った風で敵全体の兵士数を15%減少させる

スキル（自動）

『指揮LV3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御LV3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃LV3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

名前：除盛隊 兵種：上忍・影組

体力：15 攻撃力：21 移動力：300 コスト：112（1人につき）

スキル（自発）

『瞬転法陣LV3』：最も近くの自軍部隊の近くへと移動することができる

スキル（自動）

『隠密行動LV3』：夜間戦闘時、敵に視認されない

『韋駄天LV3』：移動範囲が2倍になる

「白髭海賊団の時に、俺の前の敵に放った技はこれだな。これもあ
る意味でチートだよな。先輩の部下も、機動力に関してはピカイチ
だし」

名前：韓当 字：義公 真名：肇 資金：19872

体力：3600 攻撃力：10500 防御力：1530 移動力：
50

兵士最大数：1000人

武器：加農砲（攻撃力：8000 移動力：-100）

スキル（自発）

『砲撃LV3』：小範囲に固定ダメージ（5000）。対象が建物
の場合、威力は3倍となる

スキル（自動）

『兵器改良LV3』：兵器の威力を60%上昇

『攻城LV3』：建物に対して攻撃時、攻撃力30%上昇

『開発LV3』：兵器開発の為に使用する資金が15%減少

名前：韓当隊 兵種：爆破工作員

体力：6 攻撃力：50 移動力：65 コスト：570（1人につき）

スキル（自動）

『兵器改良Lv3』：兵器の威力を60%上昇

『攻城Lv3』：建物に対して攻撃時、攻撃力30%上昇

「はいはい。及川が言っていた拠点があつたほうが動かしやすいつて、そういう意味か。しかし、加農砲とかありなのか？部下も名前が爆破工作員つて、どこのテロリストだよつて」

名前：魯肅 字：子敬 真名：健治 資金：99999999

体力：2500 攻撃力：2000 防御力：1680 移動力：100

兵士最大数：1000人

武器：ただの扇（防御力：30）

スキル（自発）

『流言飛語Lv3』：3ターンの間、敵単体部隊の兵数20%減少

『勧誘Lv3』：敵部隊の兵力20%減少させ、自軍部隊の兵数20%上昇

スキル（自動）

『盾装備Lv3』：遠距離攻撃によるダメージを60%減少

名前：魯肅隊 兵種：商人

体力：3 攻撃力：2 移動力：200 コスト：10（1人につき）

スキル（自動）

『商魂Lv3』：政務パートにおいて、所持している資金の（兵士数×0.3）%分上昇させる。（最大300%）

「はあっ！？なんだ、これ！？マジでなんなんだ、これ！？資金が1：10：100……っっ！？（啞然）」

名前：陸遜 字：伯珂 真名：？？？

体力：2000 攻撃力：4800 防御力：3200 移動力：140

兵士最大数：1000人

武器：九節棍「紫燕」（攻撃力：2000 防御力：2000）

スキル（自発）

『火計Lv1』：小範囲の部隊へ大ダメージ。

スキル（自動）

『癒しの風Lv1』：自軍のターン終了時、武将と兵の体力を5%回復する

『軍師Lv2』：スキルが成功した場合、部隊に所属する兵士の攻撃力を35%上昇させる

「俺も真名を聞いたから知っているけど、ステータス上では知らない扱いか。やはり、そういった関係にならないと教えてはもらえないってことだろうな。同性同士なら問題ないみたいだけど」

名前：丁奉 字： 真名：????

体力：2800 攻撃力：5600 防御力：950 移動力：235

兵士最大数：500人

武器：大弓「雷鶴荒殻」（攻撃力4000 スキル『流星雨』）

スキル（自発）

『流星雨Lv1』：空中高く飛び上がり、地上に多数の矢を放つ。

レベルがあがることに攻撃回数増加

スキル（自動）

『もつたいないLv1』：戦場に捨てられた物資を回収し、自分のものとして使用することができる。

『必中Lv1』：攻撃が外れない。レベルがあがると攻撃が、鎧や盾を避けて生身に当たるようになる。

「先輩の言う通り、中々お眼にかかれな、もといおもしろいスキルだわ」

名前：巖虎 字： 真名：????

体力：1800 攻撃力：2800 防御力：1650 移動力：182

最大兵士数：1000人

武器：青色の箆手（攻撃力300）

スキル（自発）

スキル（自動）

名前：山越族・若人集

体力：14 攻撃力：16 移動力：125

スキル（自動）

『援護防御Lv1』：近くの自軍部隊の防御力を30%上昇する。

「あるえー？敵虎のスキルは？え、俺好みに開発しちゃっていいの？……つて、何を考えているんだ」orz

なまじ犬耳と尻尾を生やした姿を幻視しているので、そっち方面も嬉々としてやってくれそうではあるけど……。まあ、今は頭の片隅に追いやっておこう。

名前：敵興 字： 真名：????

体力：1800 攻撃力：2500 防御力：1950 移動力：182

最大兵士数：1000人

武器：赤色の具足（防御力：300）

スキル（自発）

スキル（自動）

「……巖虎の双子の姉妹っていつていたよな。武器の攻撃力と防御力を引いたら、まったく同じステータスか。この娘もまた開発していくパターンか。この姉妹って戦場ではどんな感じで戦うんだろう？サポートし合っているんだったら…俺がつけている援護系のスキルを持たせたほうがいいよな」

名前：藩臨 字： 真名：瑠璃

体力：5000 攻撃力：12000 防御力：10000 移動力：300

総兵士数：0人

武器：太刀「龍紅爪」（攻撃力6000 防御力5000 スキル：竜吼砲）

スキル（自発）

『竜吼砲Lv3』：対象の武将に対して、4000の固定ダメージを与える。

スキル（自動）

『いくさ人Lv2』：ターン終了時、自分の隊に兵がいなければ体力を40%回復する。

「は？……なんで、藩臨の真名を俺が知っていることになっているんだ？えっ？まさか、彼女のルートに入るためには一騎打ちで勝つ

ことが最低条件だったとか?……(きよろきよろ)……部屋、掃除
しておこうかな」

名前：黄乱 字： 真名：????

体力：3000 攻撃力：6500 防御力：3000 移動力：
100

最大兵士数：5000人

武器：大槌「陽湖畔」(攻撃力：3500 効果：気絶)

スキル(自発)

スキル(自動)

『指揮Lv2』：部隊に所属する兵士の攻撃力が20%上昇

『喝!Lv3』：部隊に所属する兵士はどんな必殺の攻撃をくらっ
ても体力を1残して踏ん張ることができる。

「お、これも中々お眼にかかれないスキルだな。けど、生き残れて
も回復する手段が無いと……健治に救護隊と衛生兵を作ってもらっ
か。しかし……この武器なんて呼ぶんだ?ようこはん?ひこはん?
……まさか、“ピコハン”じゃないよな」

名前：尤突 字： 真名：????

体力：2400 攻撃力：2500 防御力：6000 移動力：
236

最大兵士数：2000人

武器：漆黒の帯（防御力：3000）

スキル（自発）

『捕縛Lv3』：無傷の状態の武将でも無力化し、捕縛することができる。

『摩掛操帯法Lv3』：一騎討ち専用スキル。帯を自由自在に操り、敵を自分の防御力の3倍の力で締め上げる。

スキル（自動）

『女王さまLv1』：攻撃ターンの間、攻撃力が15%上昇する。

「……防御力の3倍って、18000？何気に強キャラじゃないか。問題は一騎打ち専用ってところか」

名前：費棧 字： 真名：????

体力：1300 攻撃力：1000 防御力：1200 移動力：
100

最大兵士数：3000人

武器：孔雀の尾（防御力：200）

スキル（自発）

『伏兵Lv3』：部隊に所属する兵士をMAPの好きなところに配置することができる。最大3箇所まで。

『挟撃Lv3』：敵部隊と戦闘になった時、部隊を2つに分けて左右から攻撃することが出来る。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『軍師Lv3』：スキルが成功した場合、部隊に所属する兵士の攻撃力を50%上昇させる

『幸運Lv3』：遠距離攻撃無効

「……費栈、すげえ。軍師の中の軍師じゃん！スキルの『伏兵』と『挟撃』の2つと『軍師』のコンボは反則だろ。『指揮』も合わせると80%アップ!？」

先輩たちと新しく仲間に加わった人間のステータスを見終えた俺は、こう思った。

「明日の模擬戦はやめておこう。うん、俺は太守としての政務という大事な仕事があるし、藩臨たちだって建業に引越してきたばかりでいきなり戦えって言われても戸惑うだろうし、下手したら先輩たちと溝が深まってしまいかもしれないしな。うん、そうしよう」

俺はそう自分に言い聞かせながら、椅子から立ち上がり部屋の片付けをちょっととして、寝台に横になった。

結局、その夜は誰も訪ねてくることはなかった。……（泣）

九話（後書き）

お気に入り登録323件

日間ランキングも上位に食い込んでいて感激です

これからも頑張ります

十話

十話

眼前に広がるのは見通しの良い大平原。

本日はここで、新しく仲間となった藩臨たち山越の民と交流を目的とした模擬戦が行われることになった。

それも午前と午後の2回。立食形式の昼食を挟むことによって、さらに交流を深めようというのが先輩の案だ。

まあ、戦力を均等に分けるということで、昨日全員のステータスを確認していた俺が抱いた最悪の事態が現実のものになってしまったのだが……。つまり、俺こと太史慈率いる【太史慈隊】VS【俺たちを除いた太史慈軍】というのが今回の模擬戦の内訳である。

戦場となる大平原を挟んだ向こう側には、本来は味方であるはずの万を超える軍勢が見える。俺たちから見て正面には藩臨と黄乱の旗が見え、右側には嚴虎と嚴興の姉妹の旗。左側には尤突と悟道の2人の旗が見える。そして、作戦を伝えて廻っているのか費棧の旗が右へ行ったり、左に行ったり、正面でいくらか止まって、また右へ、みたいなことを繰り返している。ちなみに先輩たちは、本陣に固まっただけだ。

先輩が模擬戦を午前と午後に分けたのは、午前の戦いを反省して、皆で一丸とならないと対抗できないってどういう事を藩臨たちに教えるためなのではないか。

それを考えた俺は大きく溜め息をついた。

「つまり、俺たちは全力で闘わないといけないって訳か。べ、別に勝たなくてもいいやって思っていたわけじゃないんだからね」

「……」

うう、巷で有名なツンデレとやらを披露してみたが、まったくいっていいほど反応がないのももの凄く恥ずかしい。

一応、彼らも建業の街で暮らしているため、建業の民との心温まる交流もあって呼び出した当初の頃よりも幾分か感情が表に出るようになってきてはいる。しかし、こういうことには未だに反応してくれない。

「はあ、早く始まらないかな」

「太史慈さま。あちらの軍勢に動きが」

そう俺に伝えてきたのは犬の面を被った青年だ。彼の言葉どおり、右側に展開していた敵虎と敵興の姉妹率いる軍勢が接近しつつあった。

「右翼に伝令。いつも通り、2人1組となって対処するようにと」

「はっ！」

そう返事をして右翼へ向かう犬の面の青年。……面倒だ、次から彼のことは『ケン』と呼ぶことにする。

それはともかく、これからどうなることやら……。

その頃

「たった5000人。だけど、この建業の地において最強を誇る先輩が率いる、これまた自他共に認める最強の部隊」

「て、敵に回して初めて分かる、この恐ろしさ」

「あんなのがー、街に攻めてきたら、私は民を丸ごと連れて逃げますねー」

「ははは。正直者だね、陸遜は」

そう言つて談笑しているのは、僕と後輩で現在は建業の国庫の守人である魯肅、彼もまた後輩で現在は建業の兵たちが身に纏う武具や敵に突破されにくい防壁を作っている韓当、そして新規参入の軍師にして内政にてその敏腕を振るっている陸遜の4人だ。

本当は一刀くんが連れて来た山越族の皆とも一緒に対策を練りたかったのだけれど、藩臨や嚴虎たちに『我々は太史慈さまに従うのであつて、貴様らと組むのではない』と断言されてしまった。おかげで、僕たちは本陣で待機し、彼女たちが山賊たちを相手して勝ってきた布陣で一刀くん挑むことになってしまった。予想はしていたけど。

「京一郎さん、正直にいつて彼女たちは勝てると思いますか？」

健治くんがそんなことを尋ねてきた。

「一刀くんの部下である強化兵なんだけど、僕の部下である忍者たちが7〜8人で戦って何とかなるレベルだからね。ゲームの上では圧倒的な数で戦えば勝てたかもしれないけど、この世界に来て一刀くんは彼らに2人1組で戦うように徹底させている。1人が攻撃している間、もう1人は守りに徹するように。おかげで、彼らが負けるのは武将と闘った時のみだ。けど、それも生半可な能力の武将だと囲まれて終りだけだね」

「いやー。戦いとうない！勝てるわけ無いやん」

「肇くん、これは山越族の皆と溝を埋める為に必要なことだ。戦わないっていう選択肢はない」

「うっそおおお！？」

「あつ、廠虎ちゃんと廠興ちゃんの姉妹が攻勢に出たようですー」

「伝令だ。高台にて戦況を“記録”している丁奉にこれから起こることを絶対に見逃すなと」

「御意」

「さて、何分持つかなあ」

「」「うわあ」「」

健治くん、肇くん、陸遜の頬を引き攣らせる表情が今から起こることを暗示していた。

俺が率いるのは5000人の強化兵たちだ。

とりあえず、正面に2000人、右翼と左翼に1000人ずつ、本陣に1000人を配置している。その右翼に厳虎・厳興姉妹率いる2000人の軍勢が迫ってきていたのだが、『サクツ』と敗走させた。

『ケン』の話によれば、厳虎・厳興の姉妹は鳶に油揚げを搔つ攫われたような間抜け顔を曝していたようだ。って、なんでその例えを知っているんだと、俺が首を傾げたら、竜の顔を模した面を被った青年が先日持つて行かれらしい。

って、本当かよ。

で、その姉妹は俺がいる本陣にて石畳の上で正座している。最初は嫌がっていた2人だったが、敗者に文句をいう権利は無いということとを伝えると、厳虎は嬉しそうに、厳興は嫌そうに正座した。そして暫くすると…

「師匠、足が、足の感覚が。はっ、これも師匠の愛なんですね！ よしっ、どんとこい！」

「ケン。重石を一枚乗せてやれ」

「御意」

「えっ、師匠？嘘ですよ、師匠？ししよーっ！？ああ、これはこれでいいかもー」

敵虎の方はこの状態が強くなるための修行の一環だと思って、頬を染め始めていたのでケンに命令して、重石を一枚彼女の膝の上に乗せさせた。この娘は、もう駄目な気がする。

「お姉ちゃんの馬鹿。太史慈さま、ボクはいいです」

「敵興、君らはどうして、他の軍勢と連携することもなく突っ込んできたんだ？」

「え。ボクらには必要ないと思ったからですけど」

「ケン」

「御意」

「あ、あの太史慈さま。それってお姉ちゃんの膝に乗せられたものと同じものでは、や、やめっ。あっ!?!?おもー」

悲鳴と嬌声を上げている2人はこのまま本陣にて、午前の模擬戦が終わるまでお仕置きしておくことにした。

次に動いたのは正面の藩臨と左側に展開していた尤突の部隊だった。悟道の部隊はぽっかりと空いてしまった敵虎・敵興の部隊の穴を埋めるべく動いている。悟道は大人だなー、と思ったりしなかったり。さて、どうするかな。

「太史慈さま。尤突さまと悟道さまたちの部隊は我らにお任せ下さい」

確かに藩臨に関しては俺が行かないと拙いか。……そうだ。

「ケン。伏兵には気をつけるよ」

「は？……御意。部隊の者に徹底させます」

「じゃあ、行ってくるか！」

俺は拳を鳴らして戦場に赴いた。

結論を言おう。

「いやー……ないな。これはない」

田中隊が今回の模擬戦のためだけに作った太史慈隊の本陣にて、敵軍の武将と軍師が全員石畳の上で正座し、膝の上に重石を乗せられて苦しんでいる。一名、悦んでいるのもいるけど。

午前の部の模擬戦はなんなく俺たちの勝利で終わった。俺が危惧していた費栈も、スキルを使うことなく様々な陣を組んで俺たちを困もつとしたが、そこは俺の自慢の強化兵。囲まれた瞬間に、囲んだ兵を撃破していた。

藩臨に関してはあの時の一騎打ちと同様、本気で相手をしていたが尤突と悟道、そして黄乱と費栈の部隊を撃破した部下たちが俺と藩臨を取り囲んでいた。状況を把握した藩臨は無駄な抵抗もすることなく、降伏したのだった。

で、本陣に急襲をかけた俺たちを待っていたのは、陸遜の火計と及

川の砲撃。

「ケン！韓当と陸遜に重石を追加だ！」

「御意」

「ちよつ、かずぴー！？」

「これ以上は無理ですー」

「五月蠅い！あれはマジで死ぬかと思つたわ！」

それをなんとか振り払つた太史慈隊の背後に転移してきた先輩が率いる忍者の徐盛隊。俺が石破天驚拳を使って状況を変えようとするとに狙つたように飛んでくる丁奉の矢。あと1人、俺と対等に戦える武を持つものがいたら、俺は負けていたと断言する。そう、ここに藩臨がいたら俺は負けていたと言っているのだ。

「藩臨、黄乱、尤突、費棧、嚴虎、嚴興、悟道。お前らは何で、徐盛たちと連携せずに戦つたんだ？まさか、俺たちに自分達だけで勝てると思つたか？ふざけるな！！」

俺の叱咤の声に俯く嚴虎、嚴興、悟道の3人。藩臨は俺を自分の所に引き付けていたという実績がある為、唇を噛み締めているだけだ。尤突と黄乱は何かを言いたそうにしていた為、発言を促した。

「尤突と黄乱、何か言いたげだな。聞くぞ」

「太史慈さまが率いる兵があんなに強いというのは聞いていなかったわ」

「そうじゃな。少々、『錬度が高い』…程度の情報じゃったからのう」

「ふわわ!? そんな乃愛しゃん、千代しゃま! 私が必死に走り回って手に入れた情報に目を通してくれなかったんでしゅか!? ひどい、ひどすぎるでしゅう。ふ、ふええええん」

大きな声を上げて泣く費栈を見て、俺は居た堪れない気持ちになった。

尤突と黄乱は、冷や汗をだらだらと流しながら、涙を流し続ける費栈を慰めようと声を掛けるが火に油である。彼女達が声を掛けるたびに、今までのことを思い出すのか、泣き声の大きさがどんどん大きくなっていつている。

拳句の果てには……

「今までもそんなに気がしていましたけど……ぐしゅ…、難なく勝ってきたから……ずびっ…、気にしないようにしていたけど、みんな私の話なんて聞いていなかったんでしゅね! もういいです。私はもう、貴女たちの軍師を辞めます! 太史慈さま! 私あまりの真名は天里でしゅ。私の智勇の全てを貴方さまに捧げます。どうか、お役立て下しやい!」

こんな宣言を言ったのけた費栈。その姿は、憑き物が落ちたように晴れ晴れとしていた。

十一話

十一話

【VS太史慈隊】

『勝利条件』

- ・ 敵本陣に立てられた旗を奪取する
- ・ 対等に戦えるということ、王に示せ！

敗北条件

- ・ 本陣に立てられた旗を奪取される』

立食形式の昼食を取り終えた僕たちは田中隊が作った本陣にて軍議を行っている。

僕たちがまず行ったのは、自軍の戦力の分析である。これをちゃんとしないうちに、格上の存在である太史慈隊に挑むのは無謀すぎるからだ。

「僕の部隊が得意とするのは機動力を用いた『攻撃と離脱を繰り返す戦法』だ。強さが異常である太史慈隊の兵たちだが、足の早さは人並みであることから、僕の部隊でのこの戦法はかなり有効だと思う。ただ、火力が弱いため数を減らすことは出来ない。囿、もしくは敵を誘導するのに優れていると言ってもいい」

午前は聞く耳持たずで、勝手に陣を敷いてしまっていた藩臨や黄乱といった山越の人たちも真剣な面持ちで僕の話の話を聞いている。

「ワイの部隊は基本的にこういつた野戦には向かへん。ワイらは普段、兵たちが身につける武器を鍛えたり、攻城兵器を作ったりしている職人とそれを扱う専門の兵たちの部隊なんや。午前の模擬戦では、かずびーの部隊がこちらの本陣に仕掛けてくるっていう情報があったから狙い打つことができたんやけど、さすがに2度目はないやろ。ワイがかずびーやったら、まずワイらを狙うやろうからな」

「僕の部隊は論外ですわって。僕自身、文官で戦う力はほとんどありませんし、部下たちだって筆より重い剣や槍など握ったことはありません。こうやって戦場で軍議に参加するのだって、珍しいことなんですって」

僕の後に、自分の部隊の説明をした肇くんと健治くん。彼らの話を聞き終えた藩臨たちは首を傾げている。

「そのような戦力で、どうやってお館さまを追い詰めたんじゃ？」

そう尋ねてきたのは、大槌を背負った黄乱。その後ろでは藩臨が頷いている。

僕は陸遜に向かって目配せした。意図が分かった陸遜はキャスター付きの黒板（作：韓当隊）を引き摺って、僕らと藩臨らに見える所に立った。

「ではではー、午前の模擬戦で使った作戦をご説明させていただきますー。私、太史慈軍の軍師である陸遜と言いますー。よろしくお

願いますねー」

ペコリと頭を下げた陸遜はにこやかな笑みを浮かべたまま白いチョーク（作：韓当隊）を握り、黒板に書き始めた。

「今回の模擬戦での勝敗を決するのは本陣に立てられた旗を奪取するかされるかでしたー。なので、太史慈さまが率いる部隊がこちらの本陣に近付いてくるのは明白でしたのでー、部隊を細かく分断できるように韓当隊や魯肅隊の人たちに油を撒いてもらっただけですー。こう幾つかの箱を作る感じでー。後は丁奉くんに頼んで火矢を放ってもらいました。でも、これも午後には使えないと思いますー」

火の上がった当初こそ、一刀くんと一緒に驚いていたが時間が経つにつれて火など関係なく進み、後方から襲撃を掛けてきた僕が率いる部隊と戦っていた太史慈隊だ。次に目の前で火の手が上がるのが迷わず、突き進んでくるだろう。

「よって、午後からの模擬戦では正面から戦うのと同時に、敵本陣に奇襲をかけ旗を奪取する戦法を取りたいと思いますー。言うのは簡単ですけど、実行が難しいのは分かっていますー。それと、山越族の方が好まない戦い方だっというのー。けど、現在の私たちが太史慈さまの部隊に勝つ方法はこれしかないんですー」

陸遜は藩臨たちの表情を窺うように見渡して、

「皆さんの力を貸してくださいー。これは、ここにいる全員の力を使って初めて効をなすことが出来る作戦なんですー。おねがー……頭は、……下げなくていいーほえ？」

頭を下げようとしていた陸遜の話を遮って藩臨が立ち上がった。そ

して、勢いよく頭を下げた。その行為を見ていた黄乱や厳虎たちも立ち上がって頭を下げる。

「……午前の模擬戦での敗北、……これは我らの驕りが招いたことだ。……それをこの場を持って謝罪する。……昂」

「はい、藩臨さま。オレらは師匠のことを噂で知っていた、5万人の海賊を退けたっていう話も。でも、異民族や山賊たちとの戦いが日常茶飯だったオレらは『なんだそのくらいか』みたいな考えだったんだ。費栈さん以外」

「やっぱり彼女は、知っていたんだね。一刀くん率いる太史慈隊の力を」

僕みたいな情報を集められるような部下はいなかったはずなのに、僕たちの戦力がある程度知っていた彼女は、山越の民でリーダー格である藩臨や黄乱や尤突といった主たるメンバーたちに、太史慈隊の兵1人に対してこちらは5人以上で小隊を組んで対応した方がいいと意見していた。

まあ、結局の所費栈の必死の物言いは効を為す事はなかった上に、午後からの模擬戦が午前とは比べ物にならないほど厄介なものになってしまったのだが……。

「くそう。ワシがあの時、天里の話を詳しく聞いておれば」

「妾だつて、天里と話す機会は沢山ありましたわ。なのに、妾はあの子のいう事を蔑ろにしてしまった。小さい頃から一緒に育った、幼馴染だつていうのに……」

手で頭を覆って嘆く黄乱と、俯き肩を震わせる尤突。それをオロオロと見守る敵虎と敵興姉妹。

そんな暗い空気が漂い始めた中、1人の青年が手を上げて言葉を発した。

「陸遜…殿。その作戦にケチをつける訳ではないが、本陣に奇襲をかけるのは難しいかもしれない」

「はいー？」

陸遜が首を傾げる。いや、僕自身も興味があった。彼、悟道の言いように何かを知っていると思ったから。

「費棧さまの采配で最も恐ろしく効果を発揮していたのは、伏兵と挟撃の2つです。こちらの作戦にかかって、慌てふためく敵をこちらの被害を出さずに処理できたことなど両手では数え切れないほどありました」

「本当なんですかー？」

「私は、太史慈さまに認めてもらうまで、費棧さまの下で部隊を率いていました。だから、あの方の力は理解しているつもりです。ましてや、太史慈さまの下で費棧さまがその力を振るうのかと思うと身体の震えが止まりません」

正直、彼の話の聞かなければよかったと思った。こちらが有利になる情報かと思えば、まったく逆のことだった。

「完全に無理ゲーやな」

「言うな、肇くん。始める前から気が滅入ってしまっ」

「うーん。そうになると、どうしましょうー。あちらに費棧さんがいる以上、先程のようなこちらが攻勢に出るのをただ待っているというのは無いですし。うー……」

陸遜はそう言って眉を寄せて悩み始める。あーでもない、こーでもない。と、小さな声で独り言を呟くように考えを巡らせる。

「我が軍の軍師さまが考えを纏める間、そちらの部隊が得意とする戦い方を教えてくれないか？」

「……うむ。分かった、徐盛殿」

「僕の話は、徐盛と呼び捨てで構わないよ」

「……承知。千代」

費棧のことで頭を抱えていた黄乱が藩臨の呼び掛けで顔を上げた。

「ワシの部隊か……。すまん、敵を叩き潰す？ことかのう」

「あ、オレの部隊もです」

「ボクの部隊も」

ふざけんな。この脳筋どもめ！！

藩臨の視線の気付いた尤突も顔を上げ、

「妾の部隊は……はっ、天里がないとどう動かせばいいのか分からない!？」

きよろきよろと辺りを見渡したと思っただら叫んでいた。

「……………悟道。……………頼みの綱はお前だけ」

藩臨が視線を向けると、悟道は頬を引き攣らせていた。

「えっ、あっ、いや……。壁ぐらいにはなんとか」

「……………徐盛。……………すまない、我らはこんなものだ」

あ、頭が痛い。どうやって君たちは山賊や異民族に勝ってきたんだ?と問いたい。

……………そうか、軍師として費椏がいたから勝っていたのか。山越族特有の正面から叩き潰そうとする正攻法での戦いだけでは、勝てないと思った彼女が伏兵や挟撃といった作戦を取ることによって山越族を護ってきた。

「あえて言わせてもらっけど、君たち馬鹿だろ」

「……………面目ない」

『シユン』と頂垂れる彼女らの姿を見て、僕もつい米神を押さえてしまった。

「京一郎さん、いつそのこと降伏しませんか?」

健治くんがそんなことを言ってきた。

「魅力的な案だけど、それはできないよ。ここで逃げたら、兵たちが僕たちについてこなくなる可能性がある。なんとしてでも一矢は報いないといけないんだ」

「でも、敵は少数精鋭。こちらは数だけが勝っているだけで、錬度は武将も兵たちも低い。守りに入らないと、午前のように『サクツ』と数を減らされてしまいますって」

「それだー！『がばっ！』さすが、私の旦那さまー。私が困っている時はちゃんと助けてくれるー。えへへー」

復活した陸遜に抱きつかれ、そのたわわな母性に口と鼻をふさがれた健治くんが手足をばたつかせている。陸遜はそんな彼の状態も関係なしに、『ぎゅぎゅぎゅー』と嬉しさを体現するかのように力いっぱい抱きしめる。その内、健治くんの手がぱたりと落ちて動かなくなった。

「篠塚の奴、無茶しやがって」

「肇くん、やめてあげて。きっと、健治くんは何が起こったのか理解できなかったはずだから」

「傍から見れば羨ましい状況やけど、実際にはされとうないな。割と本気で」

男2人、恋人のたわわな母性に包まれたまま昇天した後輩に向かって敬礼するのだった。

とても幼い顔立ちをした少女に見える女性が、無表情と無反応がデフォの俺の自慢の部下に指示を出して、出して……涙目になっている。命令を聞いてくれるのは嬉しいようだが、反応があそこまでないと感じる。逆にもっと恐ろしいようだ。

最初、彼女は「千代さまや乃愛さんに私の力を思い知らせてやるー！！」と躍起になっていた。

が、落ち着いてきた彼女は顔を青くして、「嫌われたかな？乃愛さん、私のこと嫌いになったかな」とぶつぶつと小さな声で呟いて暗くなっていった。

さすがに模擬戦の開始時刻が近付くと意識を切り替えて、軍師として兵たちに指示を出し、布陣を磐石な物にしていく。その手腕はさすが、としか言いようがない。

「太史慈さま。今回は午前の時とは違い攻めの姿勢で行ってもらいましゅ。陣形は魚鱗の型で、太史慈さまには開始直後に、石破天驚拳を右側に見えるあの森に放ってもらいます。私だったら、本隊とは別に敵陣を襲撃し旗を奪取することを目的とした機動力に優れた部隊を作成しますので、恐らくあちらも似たようなことを考えているはずでしゅ」

ここで深呼吸をして俺をまっすぐな瞳で見上げる費様。

「分かった。その作戦に乗ろう。他に気をつけることはあるか？」

「はい、勿論です。いくら脳筋の山越の武将いえど、午前の戦いで太史慈しゃまがどれだけ大きな存在であるかということは、もう分かっているはずでしゅ。徐盛さんや陸遜さんの話を聞いて、太史慈隊の兵士1人に対して数人で対応するということが考えられましゅ。こうなると、その場に長く引き止められることになり、今日二度目の戦いということでは疲労が太史慈隊の精度を奪うことがあるかもしれません。これは相手にも言えることでしゅけど」

「こちらが行うのは短期決戦っていうことだな」

「御意でしゅ」

「兵はどのように配置する？」

「正面に3000、右翼と左翼に500ずつ。本陣に500。そして、左側の森に500人、伏兵を配置します。太史慈さまには前線で兵を鼓舞しつつ、本陣を目指してもらいたいのですが」

王が自ら戦場に、それも最前線で戦えつて、これは彼女に試されていると思っただけかな。真名を預けられはしたけど、本当に自分が命を賭けてもいい存在なのかを彼女なりに見極めようとしているのかもしれない。

それなら、答えるほかに選択肢は無いだろう。先輩たちには悪いが、ちよつと本気でやらせてもらおうとしようか。

「全軍、拔刀！」

俺の突然の命令にも兵たちは乱れることなく応対し、剣や槍をその手に構える。

「さ、本日2度目の戦いだ。抜かりがないようにいくぞ！」

「「「「「んっ!!」「」「」

「ふわわ〜、眼が、眼がまわりましゅ〜」

【備考】

- ・ 太史慈隊の核となるメンバー名を決定しました。
- ・ 十二支で行きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6422y/>

『禁・三国無双』 ～孫呉編～

2011年12月5日23時50分発行